

# 見島ジーコンボ古墳群 第 124 号墳

## 潮待貝塚

### 出土資料調査報告

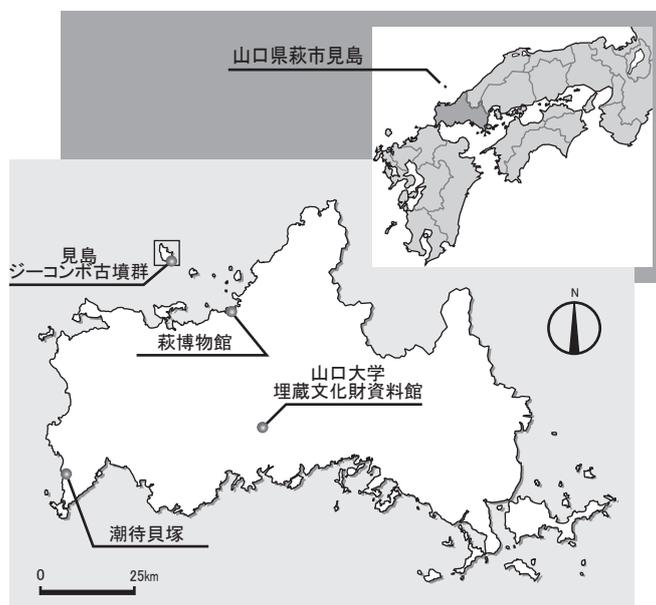
2016

山口大学埋蔵文化財資料館

# 見島ジーコンボ古墳群 第124号墳

## 潮待貝塚

### 出土資料調査報告



2016

山口大学埋蔵文化財資料館



## 序

山口大学が所在する県内五つの地区(山口市:吉田地区・白石地区、宇部市:小串地区・常盤地区、光市:光地区)は、いずれも遺跡の上に立地しています。埋蔵文化財資料館は、本学の施設拡充等工事により遺跡が破壊される可能性が生じた場合、文化財保護のための発掘調査を実施することを主要業務としていますが、その調査・研究成果を報告書の刊行、実物資料展示、データベースの構築など様々な方法により広く地域社会に公開することも重要な責務と考えています。

さて、当館には上記構内遺跡から出土した資料の他にも、山口県の著名遺跡から出土した資料が数多く収蔵されています。これは主として当館設立以前に本学教員等により調査され、本学各所に収蔵されていたものを継承した資料群です。これらの資料に対し、当館は平成22年度より収蔵資料の継続的な調査研究を推進するため、「館蔵資料調査研究報告書」の刊行を開始いたしました。

平成27年度は、萩市見島所在の見島ジーコンボ古墳群第124号墳から出土し、当館および萩博物館に収蔵されている資料と、当館が収蔵する下関市所在の潮待貝塚出土資料の調査を実施しました。本書はその調査報告となります。見島ジーコンボ古墳群第124号墳は昭和36年に、潮待貝塚は昭和25年および昭和36年に発掘が実施されており、調査後実に半世紀以上もの間、資料の学術公開が行われませんでした。見島ジーコンボ古墳群は国指定史跡であり、潮待貝塚は山口県内でも稀少な縄文貝塚遺跡であることから、当館が収蔵する県内遺跡資料の中でも特に重要と位置づけられるものです。本書を考古学・歴史学・地域史研究等の基礎資料として活用いただければ望外の幸せです。

最後になりますが、当館の調査・研究活動にあたって、ご支援、ご協力を頂いた萩博物館をはじめ関係機関、関係各位に心から厚く御礼申し上げますとともに、今後とも引き続きご理解、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成28年3月

山口大学埋蔵文化財資料館長

山内 直樹





## 凡例

### 【見島ジーコンボ古墳群】

1. 本報告書における見島ジーコンボ古墳群の遺構番号は、『見島総合学術調査報告』(山口県教育委員会 1964)で付されたものに準拠している。
2. 見島ジーコンボ古墳群の略号を「MJ」で表記している。第124号墳は「MJ124」となる。資料の種別に関しては萩博物館所蔵品の土器類に「H」、山口大学埋蔵文化財資料館所蔵品の土器類に「Y」、鉄器類に「Yi」の略号をそれぞれ付して識別している。
3. 遺物実測図の縮尺については、以下のように統一した。  
土器…1/2または1/3 金属器…1/2

### 【潮待貝塚】

1. 当館では、潮待貝塚を「SIO」と表記し、資料を管理している。
2. 遺物実測図の縮尺については、以下のように統一した。  
土器…1/3 石器…石鏃(1/1)以外は1/3 貝製品…1/3

### 【共通】

4. 遺物の実測図は、下記のように分類した。  
断面黒塗り……須恵器、金属器  
断面白抜き……土師器
5. 土器の色調記号は、主として農林省農林水産技術会事務局監修『新版標準土色帖』(1976)に準拠した。

# 本文目次

## 第Ⅰ章 見島ジーコンボ古墳群第124号墳出土資料調査報告

第1節 遺跡の位置と環境	……………(横山)……………	1
第1項 地理的環境	……………	1
第2項 歴史的環境	……………	1
第2節 第124号墳の調査	……………(横山)……………	4
第1項 昭和36年の現地調査	……………	4
第2項 第124号墳の出土資料	……………	10
第3節 小結	……………(横山)……………	27

## 第Ⅱ章 潮待貝塚出土資料調査報告

第1節 遺跡の位置と環境	……………(川島)……………	29
第1項 地理的環境	……………	29
第2項 歴史的環境	……………	30
第2節 潮待貝塚の調査	……………(川島)……………	32
第1項 第1次調査	……………	32
第2項 第2次調査	……………	33
第3項 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵潮待貝塚出土資料	……………	34
第4項 出土遺物についての若干の検討	……………	42
第5項 遺物の出土位置	……………	43
第3節 周辺遺跡との関連からみた潮待貝塚	……………(川島)……………	44

## 挿図目次

第 I 章 見島ジーコンボ古墳群第124号墳出土資料調査報告	図9 第124号墳出土地点不明土器実測図①……21
第 1 節 遺跡の位置と環境	図10 第124号墳出土地点不明土器実測図② ……22
図1 萩市見島遺跡分布図………3	図11 第124号墳出土鉄製品実測図 ……23
第 2 節 第124号墳の調査	第 II 章 潮待貝塚出土資料調査報告
図2 見島ジーコンボ古墳群分布図 ……5・6	第 1 節 遺跡の位置と環境
図3 第124号墳石室実測図 ……9	図12 潮待貝塚周辺地形分類図………29
図4 第124号墳石室内・玄門付近出土 土器実測図①………11	図13 潮待貝塚周辺遺跡分布図………31
図5 第124号墳石室内・玄門付近出土 土器実測図②………13	第 2 節 潮待貝塚の調査
図6 第124号墳石室内・玄門付近出土 土器実測図③………14	図14 潮待貝塚トレンチ配置図………32
図7 第124号墳石室内・玄門付近出土 土器実測図④………15	図15 潮待貝塚B地点 第 I トレンチ土層断面模式図………33
図8 第124号墳石室内・玄門付近出土 土器実測図⑤………16	図16 潮待貝塚B地点………34
	図17 潮待貝塚出土遺物実測図①………35
	図18 潮待貝塚出土遺物実測図②………36
	図19 潮待貝塚出土遺物実測図③………37
	図20 神田遺跡調査区位置図………44

## 写真目次

第 I 章 見島ジーコンボ古墳群第124号墳出土資料調査報告	写真7 第124号墳出土地点不明土器①………23
第 II 節 第124号墳の調査	写真8 第124号墳出土地点不明土器②………24
写真1 第124号墳調査前の様子 ……7	写真9 第124号墳出土鉄製品………24
写真2 第124号墳石室完掘状況 ……7	写真10 第124号墳出土鉄製品 X線画像 ……24
写真3 第124号墳現況 ……8	第 II 章 潮待貝塚出土資料調査報告
写真4 第124号墳石室内・玄門付近 出土土器①………16	第 2 節 潮待貝塚の調査
写真5 第124号墳石室内・玄門付近 出土土器②………17	写真11 潮待貝塚出土遺物①………39
写真6 第124号墳石室内・玄門付近 出土土器③………18	写真12 潮待貝塚出土遺物②………40
	写真13 潮待貝塚出土遺物③………41
	写真14 潮待貝塚出土遺物④………42

## 表目次

第 I 章 見島ジーコンボ古墳群第124号墳出土資料調査報告	第 2 節 潮待貝塚の調査
第 II 節 第124号墳の調査	表3 潮待貝塚出土遺物(土器)観察表 ……38
表1 第124号墳出土遺物(土器)観察表………25	表4 潮待貝塚出土遺物(石器)観察表 ……38
表2 第124号墳出土遺物(鉄製品)観察表………26	表5 潮待貝塚出土遺物(貝製品)観察表 ……38
第 II 章 潮待貝塚出土資料調査報告	表6 出土遺物注記一覧 ……43

# 第I章 見島ジーコンボ古墳群第124号墳出土資料調査報告

## 第1節 遺跡の位置と環境

### 第1項 地理的環境

萩市見島は、萩市浜崎港から北北西に約46.3km離れた日本海中に浮かぶ孤島である。島の平面形態は南を底辺とする不等辺三角形を呈し、南北約4.6km、東西約2.5km、島周約24.3kmを測り、総面積はおよそ7.8km<sup>2</sup>となる。

見島は火山島であり、地質は玄武岩類、角礫凝灰岩および海岸低地部の沖積層で構成される。島は中央部から西部にかけて高く、現在航空自衛隊見島分屯基地が置かれるイクラゲ山(標高181m)が最高峰となっている。また、瀬高と呼称される中央山地により南北が分断されており、島の南部および北東部に見られる湾入部周域には僅かながら沖積低地が形成されている。それぞれに本村・宇津の集落が発達し、現在でも島への数少ない出入口として存在する。

これら海岸域にある天然の低地には、島裾を洗う波浪から生じた岩屑が砂礫浜堤や礫浜堤を形成している。見島ジーコンボ古墳群は、島の南岸線東端の晩台山南麓から、本村港の東にある孤立丘高見山の東麓までの間に形成された、東西長約300m、幅約50m～100m、標高約7mの礫浜堤(横浦海岸)に立地している<sup>註1</sup>。

### 第2項 歴史的環境

#### 1. 遺跡の分布状況(図1)

見島に埋存する遺跡の様相については、ジーコンボ古墳群以外は全く明らかとなっていないと言っても過言では無かろう。現在公表されている埋蔵文化財包蔵地の分布についても、山口県教育委員会と萩市教育委員会が昭和35年(1960)から同37年(1962)まで実施した合同調査に負うところが大きい。

見島における踏査は、昭和35年合同調査の9月4日から3日間にかけて実施したとされる。『見島総合学術調査報告』<sup>註2</sup>では、その成果として島内の13地点が紹介されているが、現在の周知の埋蔵文化財包蔵地と照合すると、「見島小学校々庭付近の遺物包含層」「薬師堂背後の遺物包含層」「見島体育館付近の遺物散布地」が**見島本村遺跡**(図1の1)、「本村東区の遺物散布地と包含層」「本村部落の東部の水田」「杉山西南斜面の遺物散布地」が**堅田遺跡**(図1の2)、「片尻の遺物散布地」が**片尻遺跡**(図1の6)、「草谷の遺物散布地」が**草谷遺跡**(図1の7)、「船戸の遺物散布地」が**船戸遺跡**(図1の9)、「船見田の遺物散布地」が**船見田遺跡**(図1の10)、「大竹の遺物散布地」が**大竹遺跡**(図1の11)、「瀬田の石器発見地」が**瀬田遺跡**(図1の3)に該当するようである。現在の**本村港**と**本村漁港**の間にある小丘で、古く大正5年(1916)に土師器壺2点と硬玉製勾玉1点<sup>註3</sup>が出土したとされ、昭和35年の合同調査においても土師器壺片4点が確認された「宮崎山の遺物散布地」は、その後明確な資料の採取に恵まれなかったのか現在では包蔵地から除外されている。また、合同調査における踏査がジーコンボ古墳群発掘調査の前提としての「見島における居住の時代的上限」「古墳の築造に先行する文化の有無」「当時の地形や島の生産力」「村落の規模とその継続期間」の確認等に目的を置いていたためか、当時既にその位置が推定されていた中世の城館跡である**要害山城跡**(図1の4)、**高見山城跡**(図1の5)に関して言及されていない。また、平成元年(1989)発行の『萩市史』第2巻では、要害山城跡の北北西約1kmの丘陵上に

土塁・石垣が見られることから、城跡の存在が指摘されている(図1の8)。

以上、見島において確認されている遺跡の分布状況を概観した。居住に適した低地が狭小である見島においては、工事中の埋蔵文化財の発見もやはり限定的な地域に限られるようであり、昭和30年以降の新知見もほぼ存しない状況と言える。

## 2. 見島ジーコンボ古墳群造営以前の見島

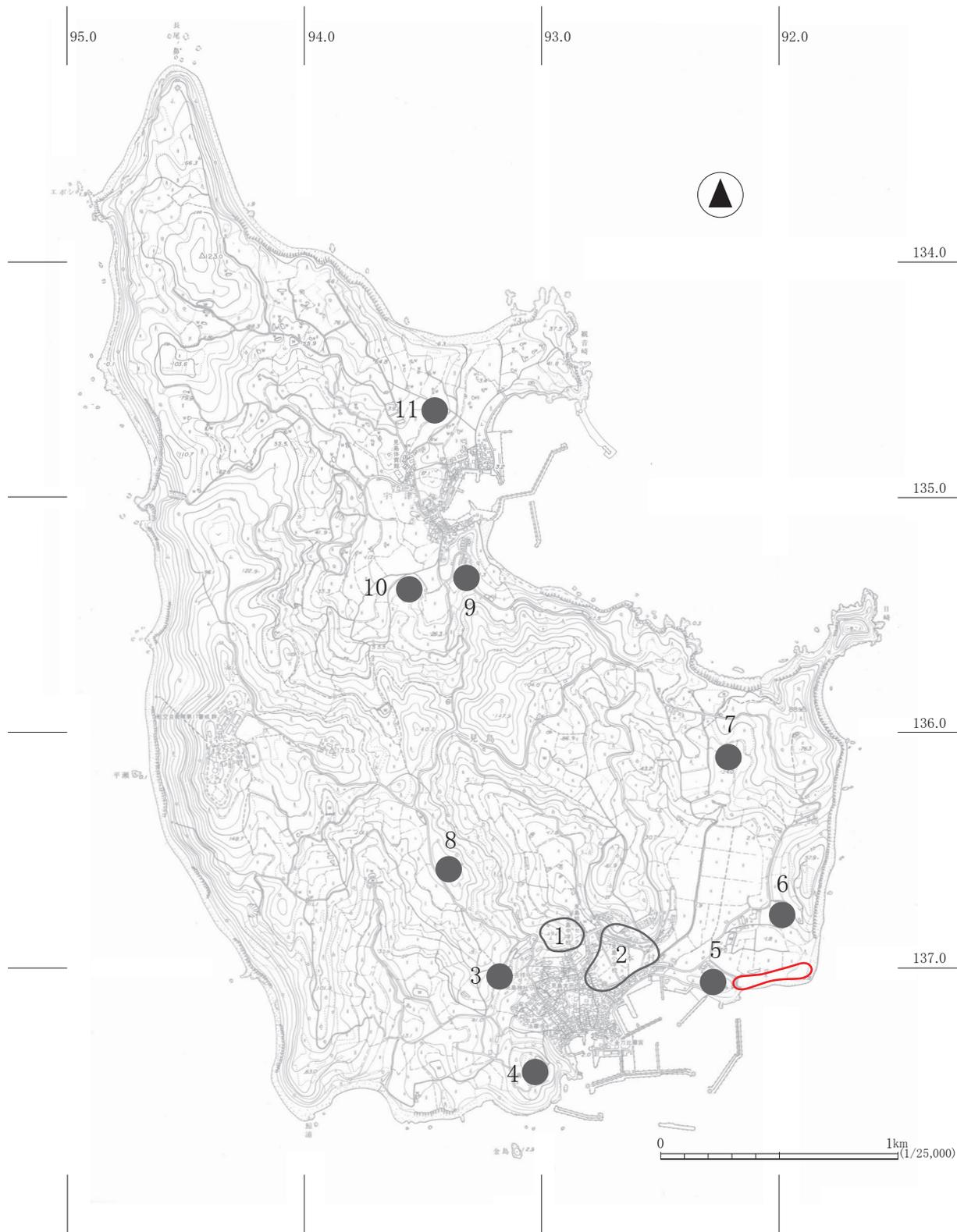
前述したように、萩市見島においてはジーコンボ古墳群以外の遺跡に未だ調査の鉞が入れられていない。そのため、各遺跡で採取された断片的な資料からジーコンボ古墳群造営以前の様相を推し量る他手段がないようである。

萩市見島発見の先史時代遺物に関しては、平成元年(1989)発行の『萩市史』に詳しい。同書によると、昭和35年(1960)より開始された合同調査の段階では、弥生時代以前に所属する遺物は同年に本村寺山南麓の宅地(図1の3)で小学生児童により発見された環状石斧の1点に限られた状態であったが、昭和45年(1970)に本村の中国電力島内発電所の増築工事にて縄文時代中期に比定される土器片が、昭和59年(1984)には見島小学校南方の水田基盤整備工事にて、遺物包含層と見られる黒褐色粘土層中から縄文時代後晩期の土器片とともに石棒片、打製石斧、石錘、そして環状石斧片などが出土したとされる。両地点とも現在の堅田遺跡(図1の2)内に位置しており、見島における人類活動が島南端の沖積低地部において開始されたことを示唆する重要な資料となっている。弥生時代の遺物については、同じく見島小学校南方水田基盤工事で確認された黒褐色粘土層中から弥生時代前・後期の土器片が出土しているが、その総量はさして多くないそうである。古墳時代の遺物も、やはり堅田遺跡を中心に多数の土師器、須恵器が採集されている状況である。昭和35年調査に伴い実施された踏査で、現在見島本村遺跡と命名されている地点で確認された多数の遺物も、主として当時代に所属するものと推される。

上記の資料はいずれも正式な発掘調査を経ずしての採集品であり、遺構の確認がなされていない状況下では見島の先史時代について多くを語り得ない。現状としては、見島では古く縄文時代中期から弥生時代にかけて、本土に面する本村周辺域において少なくとも一時的な人類の上陸活動が行われ、古墳時代に至ると小規模ではあろうが同地域に集落が形成され定住生活が行われたものと推察するに止めたい。

### 【註】

- 1) 地理的環境は斎藤・小野(1964)による。
- 2) 斎藤・小野(1964)の400～402頁
- 3) ジーコンボ古墳群に関する最初期の報告は大正12年(1923)に三輪善之助氏によってなされている(三輪1923)が、その文中に「古墳」の項目で宮崎山出土遺物が紹介されている。
- 4) 合同調査前年である昭和34年(1959)に発行された『萩市誌』には、明確な位置は示されていないが城山址として高見山城跡の存在が、古城址として要害山城跡の存在が記されている。また平成元年(1989)発行の『萩市史』第2巻(中村・国守1989)では、本村北西部のみのぼし山(養干山:標高130m)山上に土塁・石垣が構築されていることが指摘され、「みのぼし山城」の仮名が付されているが、埋蔵文化財包蔵地名としては「要害山城跡」が用いられている。
- 5) 大正15年(1926)に実施された山高郷土史研究会による見島の調査報告(匹田ほか1927)には見島小学校敷地(現:見島総合センター敷地)にて採取されたとされる弥生土器が報告されており、本村宮崎山での弥生土器採取にも言及されている。同じく両地について、昭和10年(1935)の山本博氏の報告(山本1935)には土器実測図が付されているが、直ちに「弥生土器」とは判じがたいものであり、現在資料の所在も不明確であることから『萩市史』では確実な資料として認めていない。



国指定 史跡 見島ジークンボ古墳群

- 1 見島本村遺跡 集落跡（縄文～中世）
- 2 堅田遺跡 散布地（縄文～古代）
- 3 瀬田遺跡 散布地（弥生）
- 4 要害山城跡 城館跡（中世）
- 5 高見山城跡 城館跡（中世）
- 6 片尻遺跡 散布地

- 7 草谷遺跡 散布地
- 8 要害山城跡 城館跡（中世）
- 9 船戸遺跡 散布地
- 10 船見田遺跡 散布地
- 11 大竹遺跡 散布地

萩市(1971)『萩市地形図7』（国土座標第Ⅲ系）を転載・加筆

図1 萩市見島遺跡分布図

## 第2節 第124号墳の調査

### 第1項 昭和36年の現地調査

昭和35年(1960)から3ヶ年にわたり実施された見島ジーコンボ古墳群学術発掘調査では、初年次は分布調査に当てられており、第124号墳は、古墳群西部域を調査の対象とした2年次の昭和36年(1961)に発掘調査の手が加えられている。現地調査後の詳細な経緯は不明であるが、昭和36年の出土資料は現在萩博物館と山口大学埋蔵文化財資料館に分有保管されている。平成27年度に両館に保管される第124号墳出土品の悉皆調査を実施したところ、萩博物館に16袋、山口大学埋蔵文化財資料館に3袋の遺物袋が存在することが判明した。遺物袋への注記と同封されている遺物カードから

#### 【萩博物館】

- 萩① 袋注記「63MJ124 1962.9.14 玄室内焼土」遺物カード「124号玄室内焼土 1962.9.14」
- 萩② 袋注記「MJ124号 玄門付近 19620904」遺物カード「124号(玄門付近) 1962.9.4」
- 萩③ 袋注記「124号 1962.9.4 玄門付近攪乱」遺物カード「124号玄門付近攪乱 1962.9.4」
- 萩④ 袋注記「MJ124号 玄門付近攪乱 19620904」遺物カード「124号玄門付近攪乱 1962.9.4」
- 萩⑤ 袋注記「MJ124号 玄門付近攪乱 19620904」遺物カード「124号玄門付近攪乱 1962.9.4」
- 萩⑥ 袋注記「63MJ124号」遺物カード「124号」
- 萩⑦ 袋注記「63MJ124号」遺物カード「124号」
- 萩⑧ 袋注記「63MJ124」遺物カード「124」
- 萩⑨ 袋注記「63MJ124号」遺物カード「124号①」
- 萩⑩ 袋注記「63MJ124号①」遺物カード「124号①」
- 萩⑪ 袋注記「63MJ124号(壺片)」遺物カード「124号①」
- 萩⑫ 袋注記「63MJ124」遺物カード「124号②」
- 萩⑬ 袋注記「63MJ124号」遺物カード「124号③」
- 萩⑭ 袋注記「63MJ124号」遺物カード「124号墳」
- 萩⑮ 袋注記「63MJ124号」遺物カード「124号」
- 萩⑯ 袋注記「63MJ124」遺物カード「124号」

#### 【山口大学埋蔵文化財資料館】

- 山① 袋注記「見島124号 玄門付近 9月4日」(コンテナNO.31 袋NO.6)
- 山② 袋注記「見島124号 玄室東辺 9.4」(コンテナNO.31 袋NO.2)
- 山③ 袋注記「見島124号墳 玄室内東部 昭和36年9月4日」(コンテナNO.31 袋NO.22)

という情報を確認した。

この内萩博物館所蔵品の注記に関しては、遺物取り上げ年「1962」は「1961」の誤記、また昭和36年の調査は8月29日(8月30日)から9月5日(9月6日)であることから、萩①の「9.14」は「9.4」の誤記と考えられる。また、遺物袋と資料自体に記された注記「63MJ124」の「63」は出土年を示すと考えられるので、これも「61」の誤記であろう。萩博物館所蔵品萩⑥～萩⑯には出土年月日や出土地点の記載が無いが、これは元来萩①～萩⑤に含まれていたもので、その後の資料整理過程で抽出されたものと推定される。

以上の情報から、第124号墳の遺物取り上げは昭和36年9月4日の1日で行われたと判断されるが、そ



図2 見島ジーコンボ古墳群分布図



写真1 第124号墳調査前の様子（西から）  
斎藤・小野 1964「図版21（上）第124号墳の現状」を転載

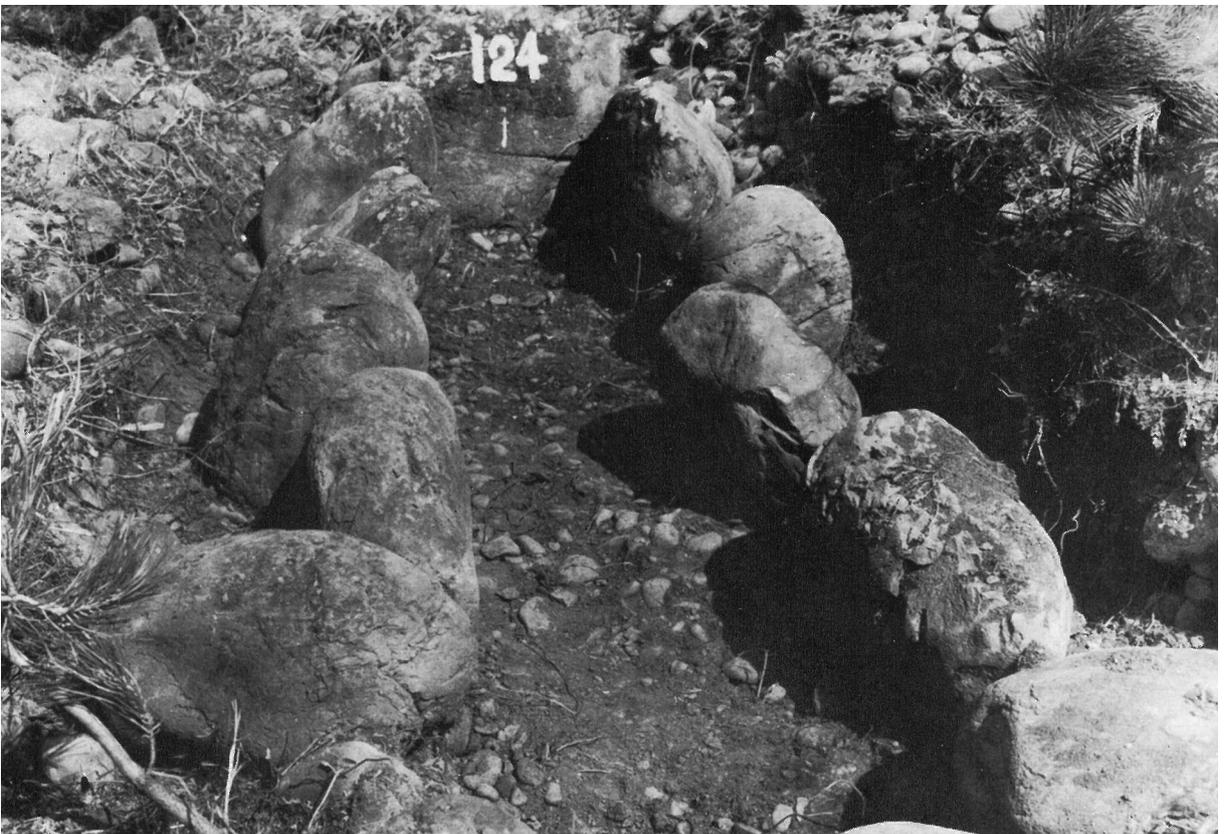


写真2 第124号墳石室完掘状況（西から）  
斎藤・小野 1964「図版21（下）同石室」を転載



写真3 第124号墳現況（東から）※2009年5月撮影

れ以上の情報は存在しないため、ここでは『見島総合学術調査報告』に記載された第124号墳の調査成果報告文と、調査時の写真(写真1・2)を転載するとともに、山口大学埋蔵文化財資料館に保管されている「第25図 第124号墳石室実測図」トレース原図の再トレース図(図3)を掲載する。

**第124号墳** 第128号墳の北東約3.5メートル、第130号と3メートルの距離にある細長い小形の石室墳である。浜堤の北斜面に当たる浅い窪みにつくられ、側石の上縁以下の部分が浜堤を掘り下げて組んである。防風林の植樹のために掘りあげたときに出土器が付近に夥しく散在していた。

奥壁は1箇のどっしりした自然石で、側石は左右5箇とも丸味のある自然石を用い、側石を縦に1列に並べ、入口には径10センチ内外の円礫と径34センチばかりの1箇の小石塊とでふさぎ、天井石は1箇残存し、その上に積石の円礫がのっていた(第25図、図版21)。

石室の方位はS80°Wで西南西に向き、奥行278センチ、幅40～50センチ、高さ35～50センチ内外を測り、横穴式石室の系統をひくが、著しく退化した型式で、一種の組合箱式石棺に似てきているところに特色がある。床面は径2～5センチ内外の円礫と灰黒色の土からなり、人骨や副葬品が収納してあった。なお床面の標高は4.045メートルである(第25図、図版21)。

鉄刀の断片のほか、須恵器の壺の破損品や破片6箇、盃2箇があったが、歯牙と人骨の小断片は奥壁寄りに、須恵器や土師器のような容器は入口付近にまとめて収納してあった。

須恵器片は267片。厚手のものは個体数が少なく口縁部は第24図-26～28に示した3点のみである。外面に叩き目をのこすものではなく、すべて、ささら状の道具または轆轤による擦痕をとどめている。内面は格子目をのこす例(第24図-29)と青海波をのこす例がある。同図-30は横瓷の腹部の破片である。

(『見島総合学術調査報告』427頁)

当石室は、天井石が1石遺存し、その上に積石が存在したとされるが、写真1からは判然としない。奥壁1石、両側壁が5石からなるいわゆる石棺状石室と考えられ、石塊が不ぞろいであることから『見島総合学術調査報告』ではBⅡ類に分類されている。現状の史跡公園でもその形状を良く留めており(写真3)、古墳群西部域におけるBⅡ類の標式遺構となっている。

【註】

1) 見島総合学術調査考古班の調査日程については、前著(横山2015)参照。



図3 第124号墳石室実測図

## 第2項 第124号墳の出土資料

### 1. 土器類

第124号墳出土土器類は、萩博物館と山口大学埋蔵文化財資料館に分有保管されている。今回の調査で両者が接合した場合は、これまで通り萩博物館に収蔵していただくこととなった。

前述の通り、第124号墳出土の遺物袋は萩博物館に16袋、山口大学埋蔵文化財資料館に3袋確認された。出土地点の判明するものは「玄室東辺(東部)」「玄室内焼土」「玄門付近(攪乱)」に大別される。「玄室東辺(部)」とは石室奥壁寄りを示し、報告文および図3から歯牙、人骨、鉄器の出土が判明している。「玄室内焼土」は本文中に記載が無い。床面の「灰黒色の土」を示すのであろうか。遺物量としては「玄門付近(攪乱)」が最も多く、「須恵器や土師器のような容器は入口付近にまとめて収納してあった」ことを裏付けている。

上記の3種は、本稿では「石室内・玄門付近」出土遺物として一括する。また、前述の通り萩⑥～⑩も元来萩①～⑤に含まれていたものが整理過程で分離した可能性が高いと考えられるが、本稿では慎重を期し「出土地点不明」として取り扱う。なお、「出土地点不明」遺物が「石室内・玄門付近」遺物と接合した場合は、「石室内・玄門付近」出土と見なす。

#### 【石室内・玄門付近出土】(図4～8、写真4～6、表1)

いずれも須恵器で、坏、坏蓋、壺、横瓶、甕が存在する。以下に概要を記す。

**H1**は坏蓋。小片であるが、天井一口縁境界部の稜から径を復元した。天井部の大半を欠失するが、扁平な蓋と見られる。口縁は軽く外反させてから垂直に下垂させており、端部を丸く収める。焼成状況や胎土の特徴からH4とセット関係にある可能性を残す。**Y1**も坏蓋。精選された胎土で器壁が極めて薄い。天井部から内湾して口縁に下降しており、口縁端部はやや内側に下垂させる。同一個体と見られる破片は存在しない。**H2**は高台付坏。歪みの大きな個体であり、全体的に器壁が厚い。丸底気味の底部外端に断面逆台形の小ぶりの高台が付く。高台は内端で接地する。体部はやや開き気味に直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く収めている。底部外面には平行する2本直線のヘラ記号が見られる。**H3**も高台付坏。底部に比して体部の器壁は2倍程度厚い。底部外端には断面逆台形で内端を肥厚させた高台が付く。体部は直線的に開き、口縁はわずかに外傾する。**H4**は剥離しているが高台の付く坏であり、高台を除くと完形復元が可能な資料である。全体的に焼成不良であるが、造形および調整は丁寧で、H1とセット関係にある可能性がある。体部に比して底部の器壁は2倍程度の厚みを有し、高台は底部外端よりやや内側に付く。口縁は屈曲気味に外反し、端部は丸く収める。

**H5**はやや長頸の壺。口縁一頸部片と体部片は接合しないが同一個体である。体部は算盤玉状に肩の張る形態で、腹部に明瞭に稜を形成する。頸部は直立気味に立ち上がり、口縁は強く外反する。口縁上端部をつまみ上げるが、これは坏蓋口縁端部の製作技法と同等である。口縁一頸部片は内外面回転ナデ、体部内面も回転ナデ、体部外面上半は自然釉と灰が大量に被るため不明瞭であるが回転ナデ、下半は横方向のナデ後縦方向のナデが施されている。なお、当資料の口縁一頸部片は『見島総合学術調査報告』第24図-28に該当する。**H6**は壺底部片で、H5と同一個体である可能性が高い。底部外端に断面方形の高台が付き、高台は内端で接地する。**H7**は土師器甕に見えるがロクロ成形品であり、胎土も須恵器と同等であることから須恵器短頸壺として報告する。底部を欠失するが、球形の体部から頸部を強く外反させる器形であり、口縁端部は内外とも肥厚させる。口縁の歪みが極めて大きく、遺物実測

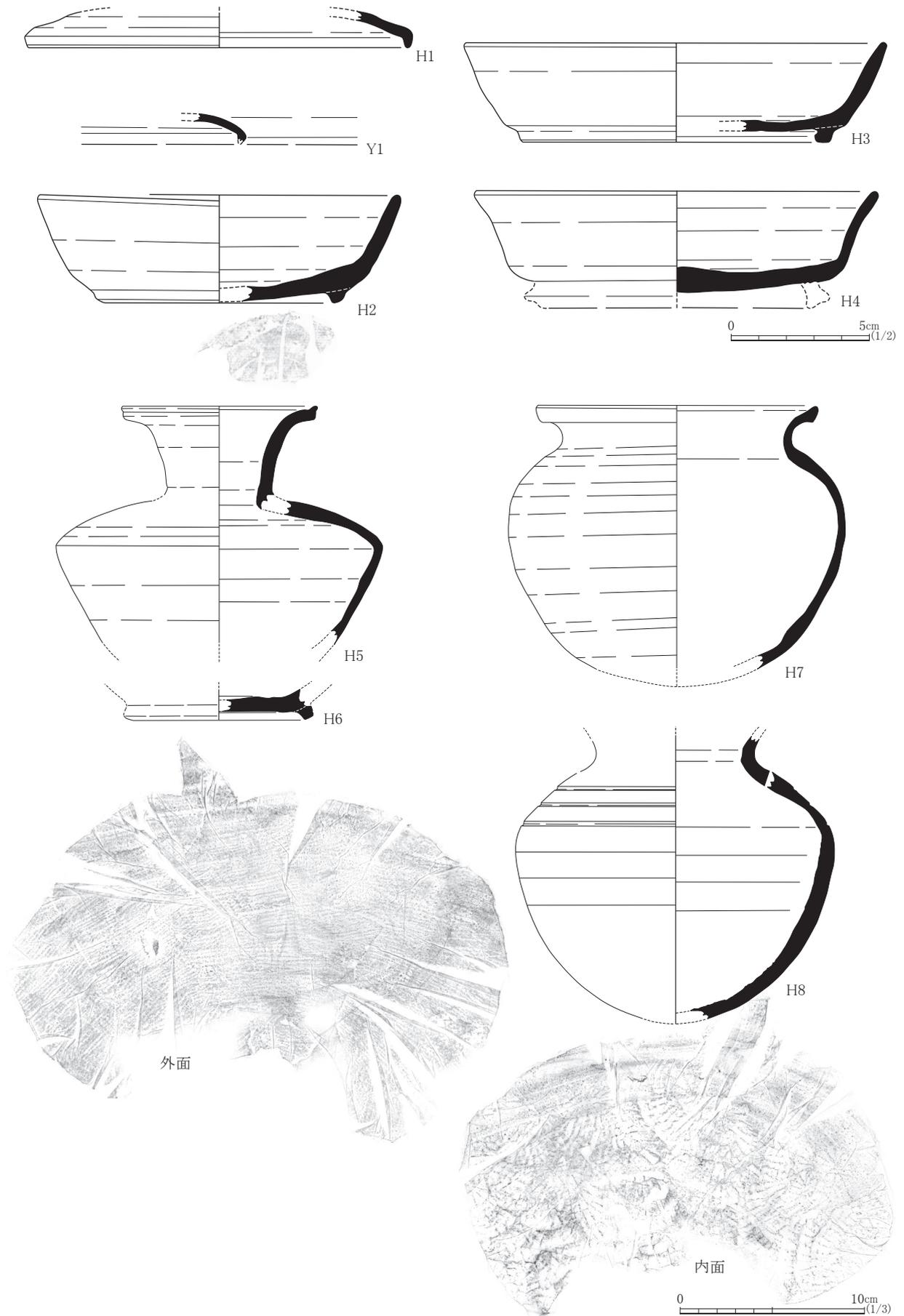


図4 第124号墳石室内・玄門付近出土土器実測図①

時は体部の水平を優先した。調整は腹部以上が内外面とも回転ナデ、体部下位は内面が不定方向のナデ、外面はミガキ気味のケズリが施され、叩き及び当て具痕は観察されない。二次焼成を受けているように見え、体部下位の器壁は内外2層に剥離している。『見島総合学術調査報告』第24図-26が当資料に該当すると思われる。**H8**は壺体部。腹部がやや上位に位置し、肩の張る器形である。肩部には3状の沈線が巡るが、自然釉と灰が多く被るため不明瞭となっている。頸部は強く外反することから短頸の壺と見られる。底部は欠失するが、無高台の丸底と見られる。肩部は内外面とも回転ナデ調整、体部下位外面にはほぼ水平でやや右上がりの平行叩きが施され、内面には車輪文当て具痕が残る。車輪文当て具痕は見島ジーコンボ古墳群では第152号墳H17に続き2例目の確認であるが、当て具が異なる。『見島総合学術調査報告』第24図-29が当資料に該当する。**H9**も壺体部であるが、こちらは平底から直立気味に体部が立ち上がる。歪みが大きい個体であり、残存部上位は内外面回転ナデ、下位は内外面指ナデが施される。接合しないH32は当資料の口縁-頸部である可能性が高い。**H10**も壺体部。底部付近の破片と見られ、外面には回転ヘラケズリ後回転ナデが、内面も回転ナデが施されるが、同心円当て具痕が残っている。

**H11**は横瓶の体部。『見島総合学術調査報告』掲載品(第24図-30)であるが、山①5点と接合することでより全形が明らかとなった。資料は頸部付け根で折損しており、頸部径から中軸線を割り出すと、体部最大幅は47.8cm、体部最大径は21.8cmに復元される。外面は平行叩き後カキ目が施されており、内面には同心円当て具痕が明瞭に残る。調整痕を見ると粘土円盤充填部側を回転台に設置し、左回りに下から上に向かい叩きを施したことが分かる。充填された粘土円盤の内面には細かい布目痕が遺存している。**H12**も横瓶の体部。H11に比して器壁が分厚く、つくりも雑な印象を受ける。焼成もやや不良で、焼き膨れが多く見られる。外面は平行叩き後ナデ消しが図られており、体端部付近のみカキ目が施される。内面には同心円当て具痕が残るが、こちらもナデ消しが図られている。図の左を下に回転台に設置し、左回りに下から上に向かい叩きを施している。体部前面(図示面)には坏または蓋の口縁端部が付着しており、胎土目状粘土の溶着も見られる。灰や自然釉は底部から背面にかけて被ることから、前面を下に横向けで焼成されたものと見られる。

**H13**~**H18**は甕。**H13**は肩部片で、頸部の付け根で折損している。外面には横方向の平行叩きが施され、内面には同心円当て具痕が残る。**H14**は底部片。上げ底状の底部を有すが、丸底に近い。外面は不定方向に丁寧にナデられており、叩き痕は完全に消されている。内面は粗いナデが施されており、部分的に同心円当て具痕と格子目状の当て具痕が残る。**H15**は底部付近の体部片。17片の接合資料である。外面は板状工具でナデが施されており、叩き痕は完全に消されている。内面の同心円当て具痕も丁寧にナデ消されており、部分的に観察できるのみである。H14とは接合しないが同一個体と見られ、H13も胎土や焼成状況から同一個体である可能性が高いと考えられる。**H16**は器壁の厚さから大甕の肩部と見られる。外面には自然釉と灰が被るが目の細かい格子叩きが観察され、内面にはナデ消しが図られているものの同心円当て具痕が残る。**Y2**も甕の肩部片。頸部根元で折損しており、色調や胎土の特徴などでH16と類似するが、器壁の厚みが異なることから別個体と判断した。外面は自然釉と灰が被るため調整痕が観察できない。内面には同心円当て具痕が残る。**H17**は甕壺類の肩部片と見られる。外面には右上がりの平行叩き後にカキ目が施されており、内面は同心円当て具痕を回転ナデにより消している。**H18**は甕の体部片。外面には右上がり、左上がり向きを変えた平行叩きが施され、内面には同心円当て具痕が明瞭に残る。出土地点不明のH37も同一個体と見られ、図示しないが他にも同一個体と見られる資料が萩①に2片、萩⑦に7片、萩⑩に2片、山①に4片存在するが、いずれも接合しない。



図5 第124号墳石室内・玄門付近出土土器実測図②



図6 第124号墳石室内・玄門付近出土土器実測図③

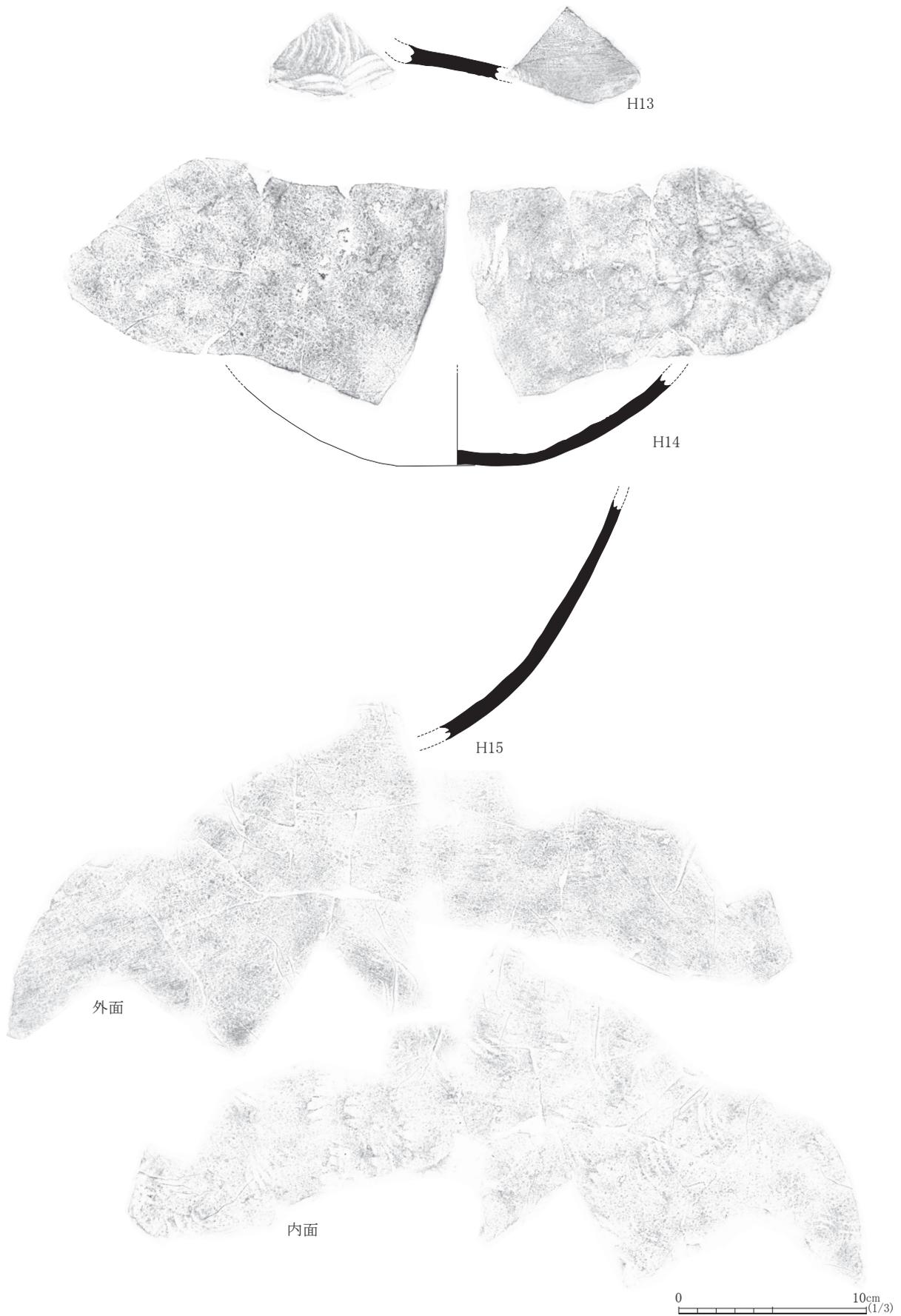


図7 第124号墳石室内・玄門付近出土土器実測図④

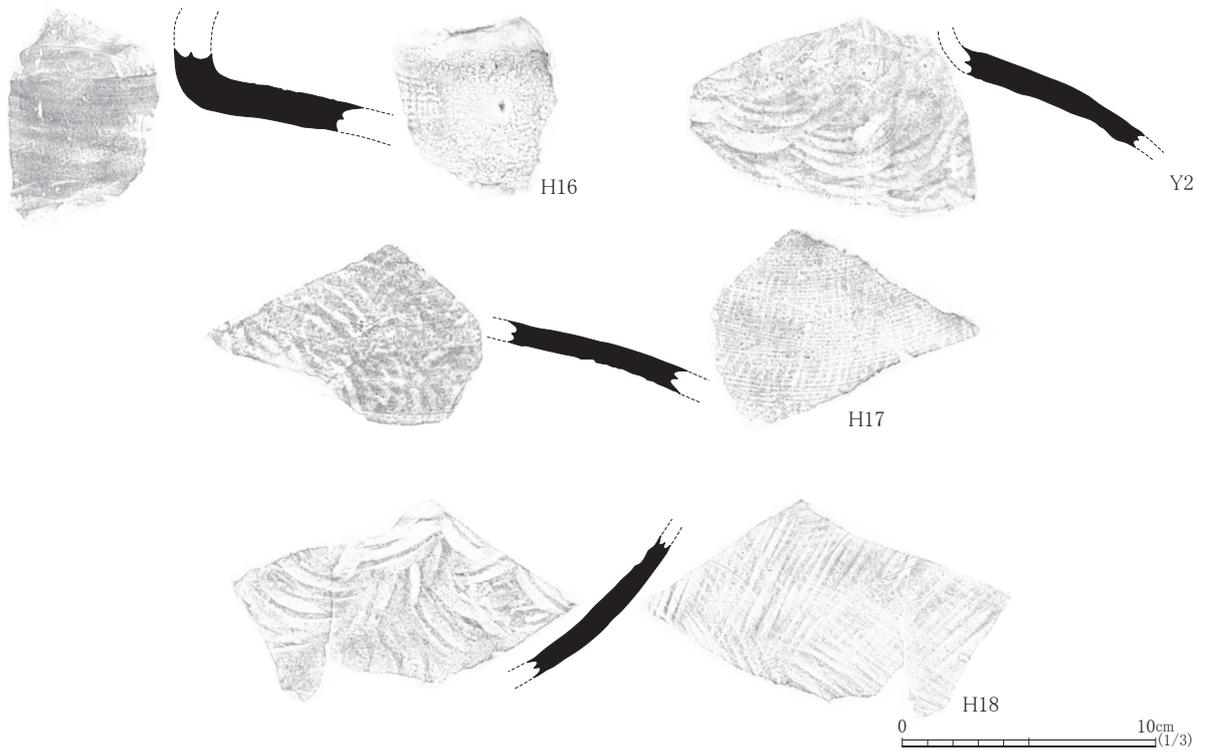


図8 第124号墳石室内・玄門付近出土土器実測図⑤



写真4 第124号墳石室内・玄門付近出土土器①



写真5 第124号墳石室内・玄門付近出土土器②



H12-1



H12-2



H14-1



H14-2



H15-1



H15-2



H13



H16-1



H16-2



Y2



H17



H18

写真6 第124号墳石室内・玄門付近出土土器③

## 【出土地点不明】(図9・10、写真7・8、表1)

前述の通り元来石室内から出土したものである可能性が高いが、その根拠を失った資料をここに掲載する。図化可能な土器はいずれも須恵器である。

**H19**は坏蓋。扁平な天井部に輪状つまみが着く蓋で、口縁はわずかに外反させ端部を内向きに短く下垂させている。歪みの大きな個体であり、残存部の口縁を接地させると天井部が傾く。外面には自然釉と灰、砂が大量に被るため、器面調整の観察は困難である。内面は口縁部に回転ナデ、天井部に不定方向のナデが施される。**H20**は口径の小さな蓋である。扁平な天井部から緩やかに内湾して口縁に降下する。口縁端部はやや内方に下垂させる。外面は自然釉と灰が多量に被るため器面調整状況が観察できないが、内面の口縁付近の回転ナデ、天井部の不定方向のナデは丁寧に施されており、胎土も精緻である。**H21**は坏の可能性もあるが器面調整の状態からここでは蓋として報告する。径の復元は天井と口縁境界の稜で行った。ややドーム状に膨らむ天井部から屈曲して口縁に降下する。口縁部は内外面とも回転ナデ、天井部は内外面とも不定方向のナデが施される。**H22**は蓋の口縁部片。器壁が薄く、胎土も精緻であるが、歪みが大きく口縁遺存部全体が接地しない。口縁端部は鳥嘴状に下垂させる。**H23**は小型の坏。やや丸みを帯びた底部から内湾して体部が立ち上がる。口縁はわずかに外反し、端部を丸く収める。大きさに対し器壁がやや厚い。底部外面は不調整であり、口縁内外面は回転ナデ、他は不定方向のナデを施す。**H24**は高台付坏の底一体部片。底部外端のやや内側に高めの高台が垂直に着く。高台内端をつまみ出すが、ほぼ全面で接地する。体部は内湾しながら立ち上がり、器壁が薄い。回転ナデは内面は底部外方から体部にかけて、外面は体部から高台周囲にかけて施される。全体的にシャープなつくりである。**H25**も高台付坏の底一体部片。丸みを帯びた底部から直立気味に体部が立ち上がる。底部外端のやや内側に断面方形の小ぶりな高台が付き、内端で接地する。外面高台外側に一部自然釉が被っていることから、倒置状態で焼成されたことが分かる。**H26**は坏の底一口縁部片。瓦質焼成となっているが須恵器の焼成不良品と思われる。平底の底部から外方に直線的に体部が立ち上がる。口縁は軽く外反させ、端部は丸く収めている。外面の風化が著しいが、底部以外は回転ナデが施されているようである。**H27**～**H30**は坏の口縁部片と見られ、形態および胎土、焼成状態からいずれも別個体と判断した。

**H31**は皿。平底の底部から緩やかに内湾して口縁に立ち上がる器形で、丸みを帯びた口縁端部の内端をわずかに肥厚させる。類似の皿は隣接する第128号墳からも出土している(MJ128H13-Y1、H33)が、口縁端部の形態から別個体と判断される。

**H32**は壺の口縁一頸部片。頸部は外方に直線的に立ち上がり、口縁はわずかに外反させ、端部は丸く収めている。内外面とも回転ナデが施されている。胎土の特徴と焼成状態から、壺の底一体部H9と同一個体である可能性が残る。**H33**は壺の底部片。器壁の厚い平底の底部片で、体部は大きく開くようである。底部外面は外端にハケ状工具の痕跡が見られるが、ほぼ不調整となっている。還元炎焼成は器壁の表面のみに及んでおり、断面は灰褐色を呈する。

**H34**は甕の口縁部片。『見島総合学術調査報告』第24図-27に該当する。頸部から大きく外反して開き、口縁上端に鈍く面を取る。口縁外端下に断面三角形の突帯を1状巡らせる。突帯下に3条の平行斜線ヘラ記号が遺存する。同一個体と見られる破片が萩⑩にもう1点存在するが、接合しない(写真8-H34)。**H35**は甕の頸一肩部片。肩の張る体部から屈曲気味に頸部が開く形態で、内外面とも回転ナデが施され、肩部内面には横方向に連続する同心円当て具痕が残る。外面には部分的に灰が被る。胎土および焼成状態からH34と同一個体の可能性がある。**H36**も甕の頸一肩部片であるが、こちらは肩の張ら

ない体部であり、内面には横方向に連続する同心円当て具痕が残るがナデ消しが図られており、外面の叩き痕は完全にナデ消されている。H37は甕の体部片で、外面には左上がりの平行叩きが施され、内面には同心円当て具痕が明瞭に残る。前述の通り石室内出土のH18と同一個体と見られ、他にも接合しない破片が複数存在する。

## 2. 金属器類

『見島総合学術調査報告』では「鉄刀の断片」が出土したとされ、石室実測図にもそれらしい描写(図3の9)が見られるが、今回の調査で確認した金属器は鉄製品1点(山③)のみである。

### 【鉄製品】(図11、写真9・10、表2)

Yi1は尖根系鉄鎌の頸一茎部片。頸部断面方形、茎部断面は五角形を呈すが、これは錆割れの結果であり元来は茎部も断面方形であったと考えられる。残存長2.0cmを測り、重量は3.17gを量る。

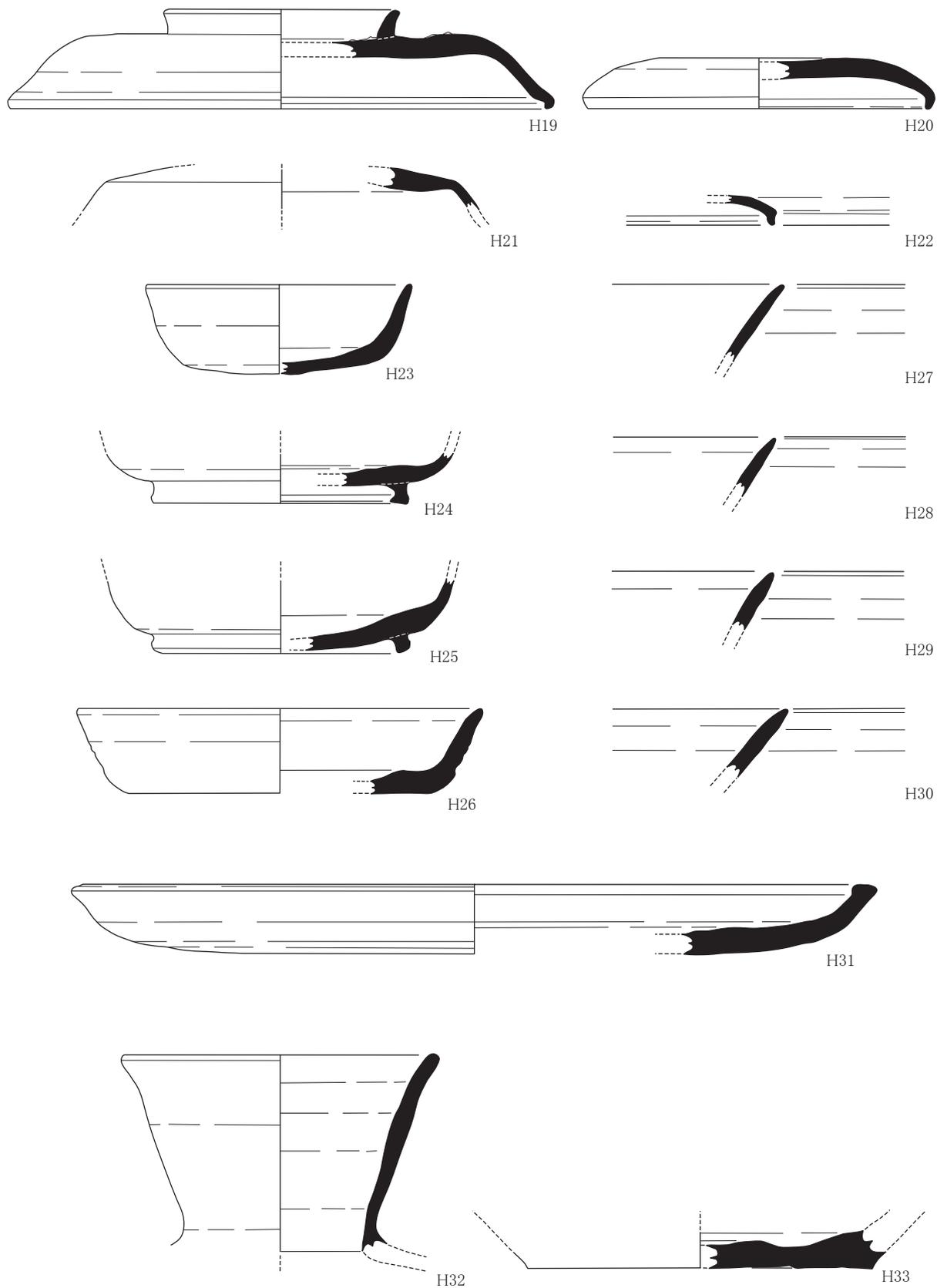
以上が第124号墳出土資料の全容である。石棺状の石室(B類)としては比較的多数の副葬品が遺存したと言って良い。

土器に関しては、後世の盗掘を考慮しなくてはならないが、坏などの小形品が少なく、中形の壺、大形の甕が多いという特徴が見られる。また、破片を含めて土師器が欠落していることも特徴と言えよう。須恵器の内、現在まで横瓶は第124号墳にのみ確認されている。山口県内では8世紀前半までは生産を確認できるようであるが(青島ほか2011)、消費地を含めその分布は極めて希薄と言える。現状で見島に供給された須恵器が山口県内で生産されたとは断定できないが、まずは山口県内における横瓶の消長に関し検討する必要があると考える。

金属製品に関しては『見島総合学術調査報告』にあまり言及されていないことから、そもそも出土量が少なかった可能性が高い。ただし、出土したとされる鉄刀の存在確認は急務であり、今後確認された場合は追加報告を行う所存である。

### 【註】

1) 第124号墳出土土器中、確認された土師器は萩⑤の体部片1点のみである。



0 5cm (1/2)

図9 第124号墳出土地点不明土器実測図①

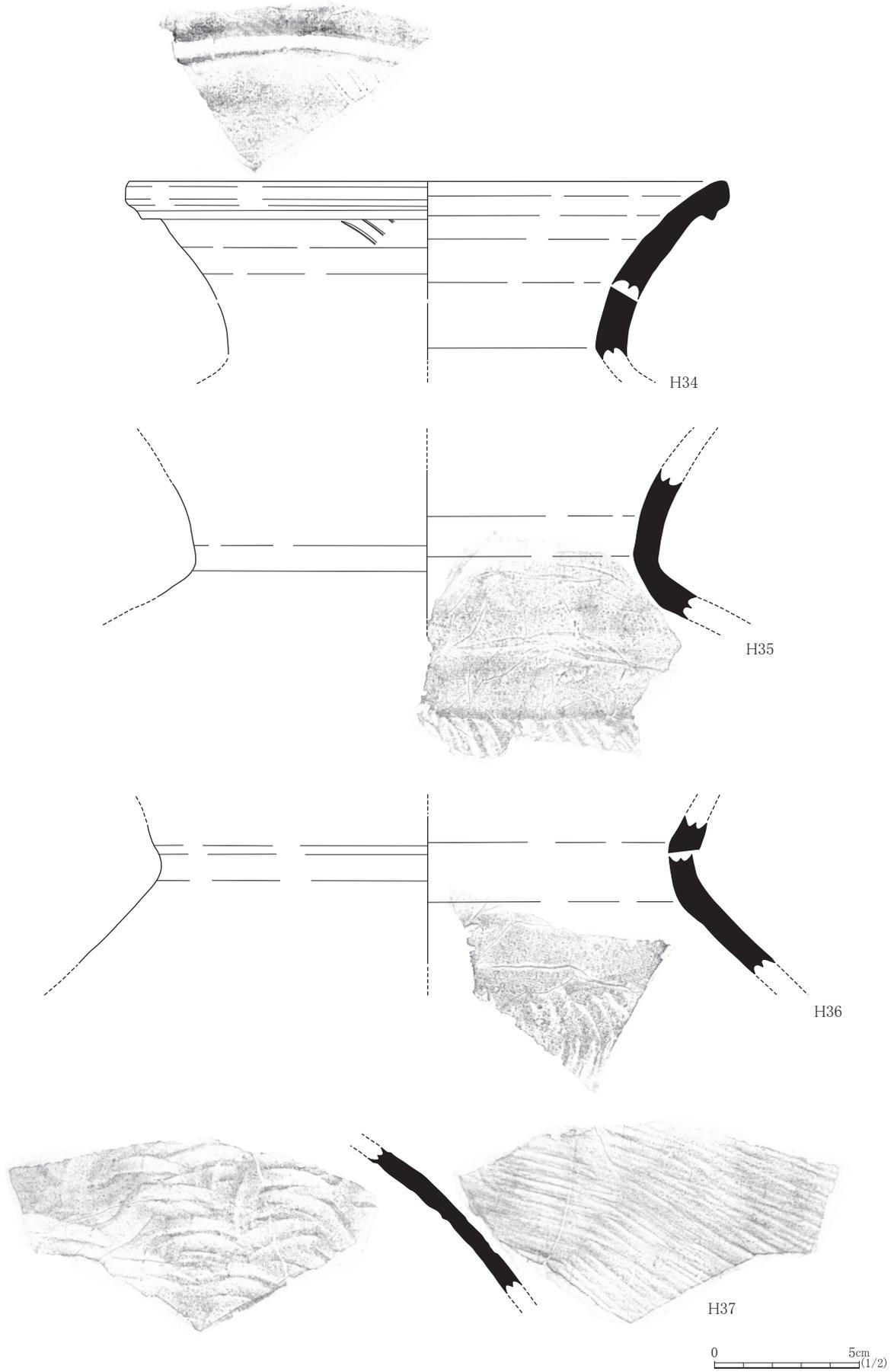


図 10 第 124 号墳出土地点不明土器実測図②



H19



H20



H21



H23-1



H23-2



H22



H24



H25



H26



H27



H28



H29



H30



H31

写真7 第124号墳出土地点不明土器①

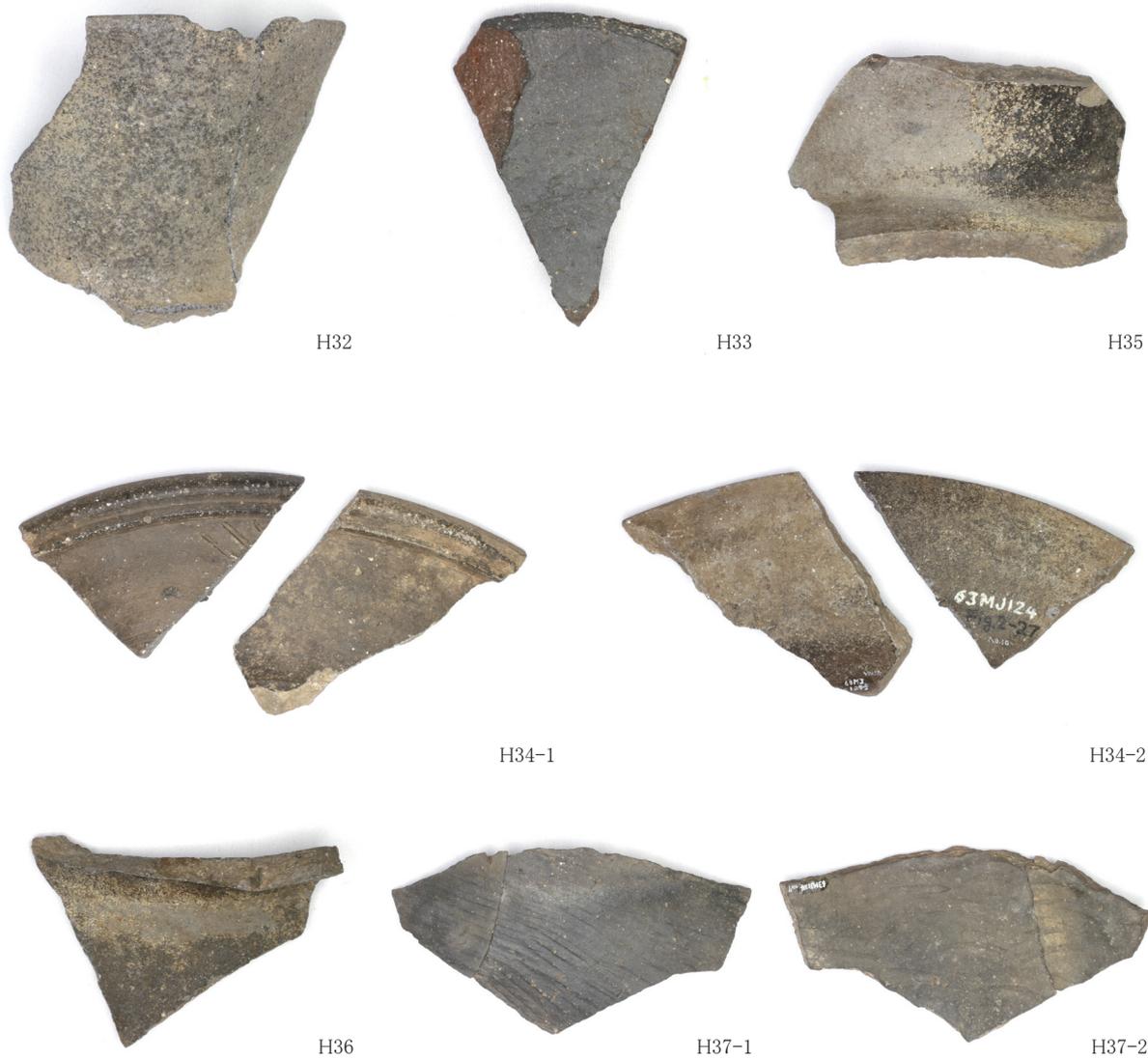


写真8 第124号墳出土地点不明土器②



図11 第124号墳出土鉄製品実測図 写真9第124号墳出土鉄製品 写真10第124号墳出土鉄製品X線画像

表1 第124号墳出土遺物(土器)観察表

萩①～⑯、山①～③の注記は4頁参照

法量( )は復元値 △は残存値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm)	色調	胎土	焼成	備考
				①口径②底径③器高	①外面 ②内面			
H1	玄門付近 攪乱	須恵器 坏蓋	口縁部	①(13.8) ②△1.3	①②灰白色(2.5Y8/1)～ 灰黄色(2.5Y6/2)	密	やや不良	扁平な蓋で、口縁は軽く外反させる。口縁端部をほぼ垂直に下垂させ、端部を丸く収める。 萩④単体の資料であるが、口縁復元は合致しないものの胎土・色調・焼成状態から見てH4と同一個体である可能性が高い。
Y1	石室内 東部	須恵器 蓋	天井 ～口縁部		①②灰黄色(2.5Y6/2)	精緻	良好	器壁の極めて薄い個体。天井部から内湾して口縁に降下し、端部をやや内向きに下垂させる。口縁端部は欠失。山③単体の資料であり、他に同一個体と見られる破片は存在しない。
H2	玄門付近	須恵器 高台付坏	口縁 ～底部	①(12.8) 高台径(9.0) ③3.9	①灰色(7.5Y/1) ②灰色(7.5Y6/1)	密	良好	底部外端に断面逆台形の小さな高台が付く。高台は内端で接地する。内湾する底部から直線的に口縁に立ち上がる。 萩⑧単体の資料であるが、同一個体と見られる萩⑧と山①の接合品1点、萩④に口縁部片1点が存在する。
H3	玄門付近	須恵器 高台付坏	口縁 ～底部	①(15.2) 高台径(11.2) ③△1.35	①灰色(5Y6/1) ②灰色(5Y5/1)	密	良好	器壁の薄い底部から外方に直線的に口縁に立ち上がる。口縁は極わずかに外傾する。底部外端に断面方形で内端を肥厚させる高台がやや内傾して付くが、底面全体で接地する。 萩⑧単体の資料であるが、萩②に同一個体と見られる底部片1点が存在する。
H4	玄門付近 攪乱	須恵器 高台付坏	口縁 ～底部	①(14.3) ③(10.2)	①②灰白色(2.5Y8/1) ～灰黄色(2.5Y6/2)	密	やや不良	全体的に焼成不良であるが器壁が薄く丁寧なつくり。口縁は屈曲気味に外反する。底部外端のやや内側に高台の剥離した痕跡が残る。 萩②単体の資料であるが、萩④に同一個体と見られる破片が4点存在する。
H5	石室内 焼土	須恵器 壺	口縁～体部	①(10.5) 腹部径(19.6)	①②灰色(N4/) 自然釉 オリーブ灰色 (2.5GY6/1)	密	良好	体部は肩の張る算盤球形を呈する。内外面は丁寧にナデが施され、叩き痕跡は見られない。口縁-頸部片は接合しないが同一個体と見られる。口縁は強く外反させ、端部を上に乗上げる。 体部は萩①・萩⑦・萩⑯接合。接合しない口縁は萩⑯で、『見島総合学術調査報告』図24-28掲載品。他に同一個体と見られる破片が萩①・山①の接合品1点、萩①と萩⑦の接合品1点、萩⑯に1点、山①に2点存在する。
H6	玄門付近	須恵器 壺	底部	高台内端径(9.3) ③△1.7	①灰色(N4/) ②暗灰色(N3/)	密	良好	底部外端に断面方形の高台が付く。外端部は欠失しており、内端で接地する。 萩②単体の資料であり、H5と同一個体である可能性がある。
H7	石室内 焼土	須恵器 壺	口縁～体部	①(15.2) 腹部径(18.2)	①褐灰色(10YR4/1) 底部付近にぶい褐色 (7.5YR5/4) ②灰色(7.5Y4/1)	密	不良	器壁の薄いロクロ成形品であり、球形の体部に短く外反する口縁を有する。口縁が大きく歪む。体部内外面とも回転ナデおよびナデ調整が施されるが、外面低位はミガキに近いケズリが施されている。 萩①・萩⑧・萩⑯・山①接合。他に同一個体と見られる破片に萩①・萩⑯の接合品1点、萩⑯1点、山①1点が存在。
H8	石室内 焼土	須恵器 壺	頸～底部	頸部径(8.6) 腹部径(17.2)	①黒色(N2/) 自然釉 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) ②褐灰色(10YR4/1) ～黄灰色(2.5Y6/1)	密	良好	球体の体部であるが、最大径は上位にある。肩部に3状の沈線を巡らす。体部下半は外面に平行叩き、内面に車輪文当て具痕が残る。頸部は強く外反するようであり、長頸にはならない。 萩①単体の資料であるが、同一個体と見られる破片が萩①に1点、萩11に2点存在する。
H9	玄門付近	須恵器 壺	体～底部	腹部径(18.5) ②(11.8) ③△11.5	①②灰色(N5/)	密	良好	歪みの大きい個体。H32と同一個体と思われるが、肩部が欠失しているため接合しない。内外面ともナデが施されている。 萩④・山①接合。同一個体と見られる体部片が萩②に2点、萩⑯に2点存在する。
H10	玄門付近	須恵器 壺	体部		①灰色(N6/) ～灰色(N5/) ②灰色(5Y6/1)	密	良好	底部付近の体部片であり、器壁が厚い。外面は回天へら削り回転ナデ、内面は同心円当て具痕が回転ナデにより消されている。 萩②単体資料。
H11	玄門付近	須恵器 横瓶	体部		①②灰色(N6/)	密	良好	器壁が薄く丁寧なつくり。頸部根元で折損。外面には平行叩き後カキ目が施され、内面には同心円当て具痕が残る。充填された粘土円盤の内面には細かな布目が残る。 萩⑥・山①接合。
H12	玄門付近 攪乱	須恵器 横瓶	体～底部		①灰色(5Y6/1) ②黄灰色(2.5Y6/1)	密	やや不良	器壁が厚く、焼成時に火膨れをおこしている。外面に平行叩き後ナデ消しが施され、端部付近のみカキ目が施される。内面には同心円当て具痕が残る。外面には坏または蓋の口縁端部が溶付しており、胎土目状の粘土も付着する。 萩③・萩⑥接合。
H13	玄門付近	須恵器 甕	体部		①黄灰色(2.5Y4/1) ②褐灰色(10YR4/1)	密	良好	頸部付け根で折損する肩部片。外面は横方向の平行叩き、内面は同心円当て具痕が見られる。 萩②単体資料。
H14	玄門付近	須恵器 甕	底部	②(6.0) ③△5.0	①灰色(7.5Y5/1)～ 暗赤灰色(7.5R3/1) ②黄灰色(2.5Y5/1)	密	良好	底部はほぼ丸底。外面は叩きをナデ消している。内面の同心円当て具痕も丁寧にナデ消されている。 萩②・山①接合。
H15	石室内 焼土	須恵器 甕	底～体部		①黒褐色(7.5YR2/2)～ 黒色(7.5YR2/1)～ 灰色(N6/) ②灰色(5Y4/1)～ オリーブ黒色(5Y3/1)	密	良好	外面は叩きをハケ状工具でナデ消している。内面も同心円当て具痕を丁寧にナデ消している。 萩①・萩②・萩⑯・萩⑳接合。H13、H14と同一個体か。
H16	玄門付近 攪乱	須恵器 甕	頸～体部		①②灰白色(N7/) 外面自然釉 オリーブ灰色(2.5GY5/1)	密	良好	体部外面は目の細かな格子叩きが施される。内面の同心円当て具痕はナデ消しが図られる。 萩③単体の資料。
Y2	玄門付近	須恵器 甕	体部		①灰色(N6/) 自然釉 オリーブ灰色 (2.5GY5/1) ②黄灰色(2.5Y6/1)	密	良好	甕の肩部片と見られる。外面は自然釉や灰、砂で覆われているため調整が観察できない。内面の同心円当て具痕は反時計回りに当てられている。 山①単体の資料。

萩①～⑯、山①～③の注記は4頁参照

法量( )は復元値 △は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	焼成	備考
					①外面	②内面			
H17	玄門付近	須恵器 甕	体部		①灰色(5Y5/1) ②灰色(N5/)		密	良好	肩部片と見られる。外面は平行叩き後カキ目が施され、内面は同心円当て具痕がナデ消されている。 萩②単体の資料。
H18	玄門付近	須恵器 甕	体部		①灰色(N4/) 灰オリーブ色(5Y5/2) ②灰色(N5/) ～灰色(N4/)		密	良好	外面に平行叩きが施され、内面に同心円当て具痕が残る。 山①の単体の資料。H31と同一個体か。他に山①に4片、萩②に2片、萩⑦に7片、萩⑩に2片同一個体と見られる破片が存在す
H19	不明	須恵器 坏蓋	天井 ～口縁部	①(18.2) つまみ径(8.0) ③3.4	①灰黄色(2.5Y6/2) 自然釉 灰オリーブ色(7.5Y4/2) ②黄灰色(2.5Y6/1) 自然釉 暗灰色(N3/)		密	良好	歪みの大きい個体。輪状つまみを有し平らな天井部から屈曲して口縁に下降する。口縁はわずかに外反し、端部を短く下垂させる。外面には自然釉と灰が大量に被る。 萩⑩単体の資料。
H20	不明	須恵器 坏蓋	天井 ～口縁部	①(11.6) ③1.7	①灰黄色(2.5Y6/2) 自然釉 灰オリーブ色(7.5Y5/2) ②灰白色(N7/)		精緻	良好	口径の小さな小ぶりの蓋で、低い天井部から緩やかに内湾して口縁に降下する。口縁端部は内方に屈曲させ下垂する。内面調整は丁寧であるが、外面は自然釉が多量に被っており観察不能である。萩⑩単体の資料。
H21	不明	須恵器 坏蓋	天井 ～口縁部		①灰色(2.5Y6/2) ②黄灰色(2.5Y6/1)		密	良好	坏底部の可能性もあるが、外面の処理から蓋と推定。 萩⑩単体の資料。
H22	不明	須恵器 坏蓋	口縁部		①②灰黄色(2.5Y6/2)		精緻	良好	胎土が精選されており、器壁も薄い。口縁の歪みが大きく小片でありながら口縁残存がきちんと接地しない。口縁端部をほぼ垂直に下垂させる。萩⑩単体の資料。
H23	不明	須恵器 坏	完形復元可能	①9.1 ②6.8 ③3.1	①②灰色(5Y5/1)		密	良好	器壁が厚めであり、口縁をわずかに外反させる。口縁内外面にのみ回転ナデを施す。 萩⑩単体の資料。
H24	不明	須恵器 高台付坏	体～底部	高台径(8.8) ③△1.2	①灰色(N4/) ②灰色(5Y5/1)		密	やや不良	全体的にシャープなつくりで、底部外端より内側にやや高めの高台がほぼ垂直に付く。高台内端部はつまみ出される。高台底面のほぼ全面で接地するが、内端は浮く。 萩⑩単体の資料。
H25	不明	須恵器 高台付坏	体～底部	高台径8.8 ③△2.5	①灰色(N6/) ②灰色(5Y6/1)		密	良好	底部外端のやや内側に断面方形の小ぶりな高台が付く。高台は内端で接地する。底部外面に平行する2本のヘラ記号が残る。 萩⑩単体の資料。
H26	不明	須恵器 坏	口縁～底部	①(11.8) ②(10.6) ③2.9	①②灰白色(N8/) ～色(N4/)		密	不良	器壁の厚い個体で、平底の底部から開き気味に直線的に口縁に立ち上がる。口縁はわずかに外反させる。瓦質焼成となっているが、須恵器の焼成不良品と思われる。 萩⑩の単体資料。
H27	不明	須恵器 坏	口縁部		①灰色(N5/) ②灰色(7.5Y6/1)		密	良好	器壁が薄くシャープなつくり。口縁端部は尖り気味に丸く収める。萩⑩単体の資料。
H28	不明	須恵器 坏	口縁部		①灰色(5Y5/1) ②灰色(5Y6/1)		密	良好	口縁端部は尖り気味に収める。 萩⑩単体の資料。
H29	不明	須恵器 坏	口縁部		①②灰色(N4/)		密	良好	器壁の厚い個体で、口縁を軽く外反させる。 萩⑩単体の資料。
H30	不明	須恵器 坏	口縁部		①②灰色(N4/)		密	良好	口縁が大きく外方に開く器壁の厚い個体。口縁端部は尖り気味に丸く収める。萩⑩単体の資料。
H31	不明	須恵器 皿	口縁 ～底部	①(27.5) ②(16.4) ③2.4	①灰色(N4/) ～灰色(7.5Y6/1) ②灰白色(N5/) ～灰色(N6/)		密	良好	器壁の厚い個体で、平底の底部から内湾して口縁に至る。口縁内端を肥厚させる。 萩⑩単体の資料で、同一個体と見られる破片は他に見当たらない。
H32	不明	須恵器 瓶子	口縁～頸部	①(10.8)	①②灰色(N5/)		密	良好	直線的に外方に開き口縁に至る。口縁はわずかに外反させる。 萩⑩単体の資料。実25と同一個体である可能性が高い。
H33	不明	須恵器 壺か	底部	②(11.8) ③△1.3	①灰色(N5/) ②灰色(N4/)		密	良好	厚手平底の底部片。底部外面はほぼ無調整で、外端部にハケ状の工具痕が見られる。萩⑦単体資料。
H34	不明	須恵器 甕	口縁～頸部	①(20.6)	①黒褐色(10YR3/2)～ 黒色(10YR2/1) ②褐色(10YR6/1)～ 黒色(10YR2/1)		密	良好	口縁外端下部に断面三角形の突帯を巡らせる。突帯の下に平行する3本斜線のヘラ記号が残る。 萩⑩単体の資料で、同一個体と見られる口縁～頸部片が萩⑩にもう1点存在する。
H35	不明	須恵器 甕	頸部	頸部径(16.0)	①黄灰色(2.5Y5/1) ～暗灰色(N3/) ②暗褐色(7.5YR3/3)		密	良好	体部内面に横方向の連続同心円当て具痕が残る。 萩⑩の単体資料。実18と同一個体の可能性あり。
H36	不明	須恵器 甕	頸～体部	頸部径(18.8)	①灰色(N6/) ～暗灰色(N3/) ②黒褐色(10YR3/2)		密	良好	肩の張らない甕の頸～体部片。外面の叩き痕は完全にナデ消されており、内面の横方向連続同心円当て具痕もナデ消しが図られている。萩⑩単体の資料。
H37	不明	須恵器 甕	体部		①暗灰色(N3/) ②暗灰色(5Y5/1) ～オリーブ黒色(5Y3/2)		密	良好	外面に平行叩きが施され、内面に同心円当て具痕が残る。 萩⑦単体の資料。H32と同一個体か。

表2 第124号墳出土遺物(鉄製品)観察表

山③の注記は4頁参照

法量は残存最大値 ( )は復元値 ▲は他と合計

遺物番号	遺構・層位	種類	部位	法量				備考
				①長さ(mm)	②幅(mm)	③厚さ(mm)	④重量(g)	
Yi 1	第124号墳 石室内東部	鉄鏃	頸～基部	①29	②7.4	③5.8	④3.17	頸部断面方形、基部断面五角形だが鏃割れしている

### 第3節 小結

平成27年度に、見島ジーコンボ古墳群第124号墳を対象に、当館所蔵資料と萩博物館所蔵資料と合わせ出土品の悉皆調査を実施した。本書はその調査成果報告である。

第124号墳は北東から南西方向に広がる古墳群のほぼ中央に位置しており、石室25基(第121～144号墳、第158・159号墳)、石室状構造物3基(外1～3)が密集して構築されている(図3)。調査時に西部域の1基に数えられたが、石室の分布を見ると、西方の140番台後半以降の石室群とはやや距離を隔てており、両者間は石室構造や開口方向も異なるものと理解される。

当墳石室に関しては、『見島総合学術調査報告』においては、組合式箱形石棺に近い形態で、扁平な石の他に形のとのわかない石塊を用いるBⅡ類に分類されている。発掘調査時には天井石が1石遺存していたとされるため、奥壁および側壁は1段構築であったと考えざるを得ないが、復元される石室高約40cmの空間に横方向から遺体が埋葬できたとは思えない。開口部の存在、積石が存在したとされる報告は軽視できないものの、調査時に人骨が開口部ではなく奥壁付近に散在していた事実からして、上部から遺体を埋葬した可能性が高いと考える。

また出土資料に関しては、第128号墳の北東約3.5mに位置していることから、その所属について、特に第128号墳石室外出土品(横山2015)と第124号墳玄門付近攪乱および出土地点不明品については慎重な取り扱いが必要となる。「防風林の植樹のために掘りあげたときに出土土器が付近に夥しく散在していた」とされる土器も、どのような取り上げが行われたか定かではない。

以上の前提で、第124号墳の築造年代および埋葬時期に関して私見を述べるとすれば、西部域での既往報告墳(横山2011、横山・松浦2012、横山2013、横山2015)同様、土器の示す年代幅が大きいことから複数回の追葬を想定せざるを得ない。所属年代の把握しやすい須恵器坏類を見ると、小型坏(坏G類)の**H23**は出土地点不明品であるが、7世紀代後半の所産と見て良く、高台が底部外端より内側に付き、高台内端をつまみ出す**H24**や、高台が剥離しているものの口縁一体部が屈曲気味に開く**H4**などは7世紀末から8世紀前半代の所産である可能性が高い。長く大きく開く口縁の外端下に突帯を巡らす須恵器甕口縁**H34**や、須恵器横瓶**H11・H12**もこの時期のものであろうか。口径に比して器高が低く、体部が大きく開かず立ち上がり、小ぶりの高台が底部外端に付く**H3**や**H4**は8世紀中頃から後半にかけての時期を当てておきたい。輪状つまみを有する**H19**は、第154号墳**H4**と形態的に差は無いことから、9世紀前半の所産と思われる。口縁内端を肥厚させる須恵器皿**H31**は8世紀以降の所産と見なしておく。

以上の土器様相から、今回の調査資料が全て第124号墳に帰属すると仮定すれば、古墳築造時期は7世紀後半の可能性があり、初葬を含めて少なくとも4回程度の埋葬が行われた可能性が高いと考えられる。

#### 【参考文献】

- 青島啓ほか(2011)『陶窯跡群Ⅰ』山口市埋蔵文化財調査報告第70集, 山口  
 池田善文(1993)「土器の基準資料と編年」, 池田善文(編)『長登銅山Ⅱ』美東町文化財調査報告第5集, 美祢(山口)  
 池田善文(2004)「集成 須恵器」, 山口県(編)『山口県史』資料編考古2, 山口  
 市来真澄(2011)「見島ジーコンボ古墳群の構築時期と石室について」, 海古墳を考える会(編)『海古墳を考えるⅠ—群集墳と海人集団—発表要旨』, 北九州(福岡)

- 小田富士雄(1975)「萩の埋蔵文化財」, 史都萩を愛する会(編)『史都萩』第32号, 萩(山口)
- 国守進「中世の見島」, 萩市史編纂委員会(編)『萩市史』第2巻, 萩(山口)
- 桑原邦彦・池田善文(1981)「防長地域の須恵器窯跡と編年研究」, 周陽考古学研究所(編)『山口県の土師器・須恵器一編年と集成一』周陽考古学研究所報3, 光(山口)
- 斎藤忠・小野忠熙(1964)「考古の部」, 山口県教育委員会(編)『見島総合学術調査報告』, 山口
- 俵教雄(1959)「第二部 沿革 第四編 古代」, 萩市誌編纂委員会(編)『萩市誌』, 萩(山口)
- 中村徹也(1983a)「[特別講演]ジーコンボ古墳群から見た見島(上)」, 史都萩を愛する会(編)『史都萩』第45号, 萩(山口)
- 中村徹也(1983b)「[特別講演]ジーコンボ古墳群から見た見島(下)」, 史都萩を愛する会(編)『史都萩』第46号, 萩(山口)
- 中村徹也・国守進(1989)「原始・古代の見島」, 萩市史編纂委員会(編)『萩市史』第2巻, 萩(山口)
- 乗安和二三(1983)『見島ジーコンボ古墳群』, 山口県教育委員会(編), 山口県埋蔵文化財調査報告第73集, 山口
- 長谷川道隆(1975)「青磁にかくされた歴史ー見島出土の唐末五代越州窯青磁片ー」, 史都萩を愛する会(編)『史都萩』第33号, 萩(山口)
- 匹田直・弘津史文・小川五郎・三宅宗悦・姉川從義(1927)「阿武郡見島文化の研究」, 山高郷土史研究会(編)『山高郷土史研究会考古学研究報告書ー台覧紀年号ー』, 山口
- 松下孝幸・分部哲秋・佐熊正史(1983)「山口県萩市見島ジーコンボ古墳群出土の平安時代人骨」, 山口県教育委員会(編)『見島ジーコンボ古墳群』山口県埋蔵文化財調査報告第73集, 山口
- 松下孝幸(1985)「山口県見島ジーコンボ古墳群の人骨ー山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の資料ー」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報IV』, 山口
- 松下真実・松下孝幸(2014)「山口県萩市ジーコンボ古墳群出土の平安時代人骨」, 山口考古学会(編)『山口考古』第34号山本一朗先生追悼号, 防府(山口)
- 三輪善之助(1923)「長門見島の遺跡」, 日本考古学会(編)『考古学雑誌』第14巻第3号, 東京
- 山本博(1935)「長門国三島村の弥生式遺跡と古墳出土遺物ー特に口帯についてー」, 日本考古学会(編)『考古学雑誌』第25巻第8号, 東京
- 横山成己(2011)『見島ジーコンボ古墳群 第154号墳出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書1, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口
- 横山成己・松浦暢昌(2012)『見島ジーコンボ古墳群 第151号墳出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書2, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口
- 横山成己(2012)「見島ジーコンボ古墳群「俘囚墓説」小考」, 「やまぐち学」推進プロジェクト(編)『やまぐち学の構築』第8号, 山口
- 横山成己(2013)『見島ジーコンボ古墳群 第152・153・155・156号墳出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書3, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口
- 横山成己(2015)『見島ジーコンボ古墳群 第128・137号墳出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書4, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口
- 渡辺一雄ほか(1983)『生産遺跡分布調査報告書』山口県埋蔵文化財調査報告書第74集, 山口県教育委員会文化課・山口県埋蔵文化財センター(編), 山口

## 第Ⅱ章 潮待貝塚出土資料調査報告

### 第1節 遺跡の位置と環境

#### 第1項 地理的環境

潮待貝塚は下関市富任字潮待に所在し、響灘沿岸の標高約4.5～6mの海成砂堆上に立地する。響灘沿岸は岩石海岸が主体をなすが、潮待貝塚の位置する安岡付近では、季節風がもたらした飛砂によって3条の浜堤が形成されている(小野1975)。さらに、洪積台地の一部には小規模な砂丘の形成もみられる。潮待貝塚は、小河川に挟まれ舌状にのびる洪積層の先端部に位置しており(図12)、砂堆との境界部に立地している。このため、居住活動の上で砂堆形成の影響を大きく受けたものと考えられる。綾羅木川河口周辺には平野部が広がり、南北に低い洪積台地がみられる。この平野部を取り巻くように、周辺には標高100m以上の山塊が分布している。背後に低台地や丘陵がひかえ生業圏内となっているものの、潮待貝塚の立地からは、海岸での生業への依存度が高かったものと推察される。

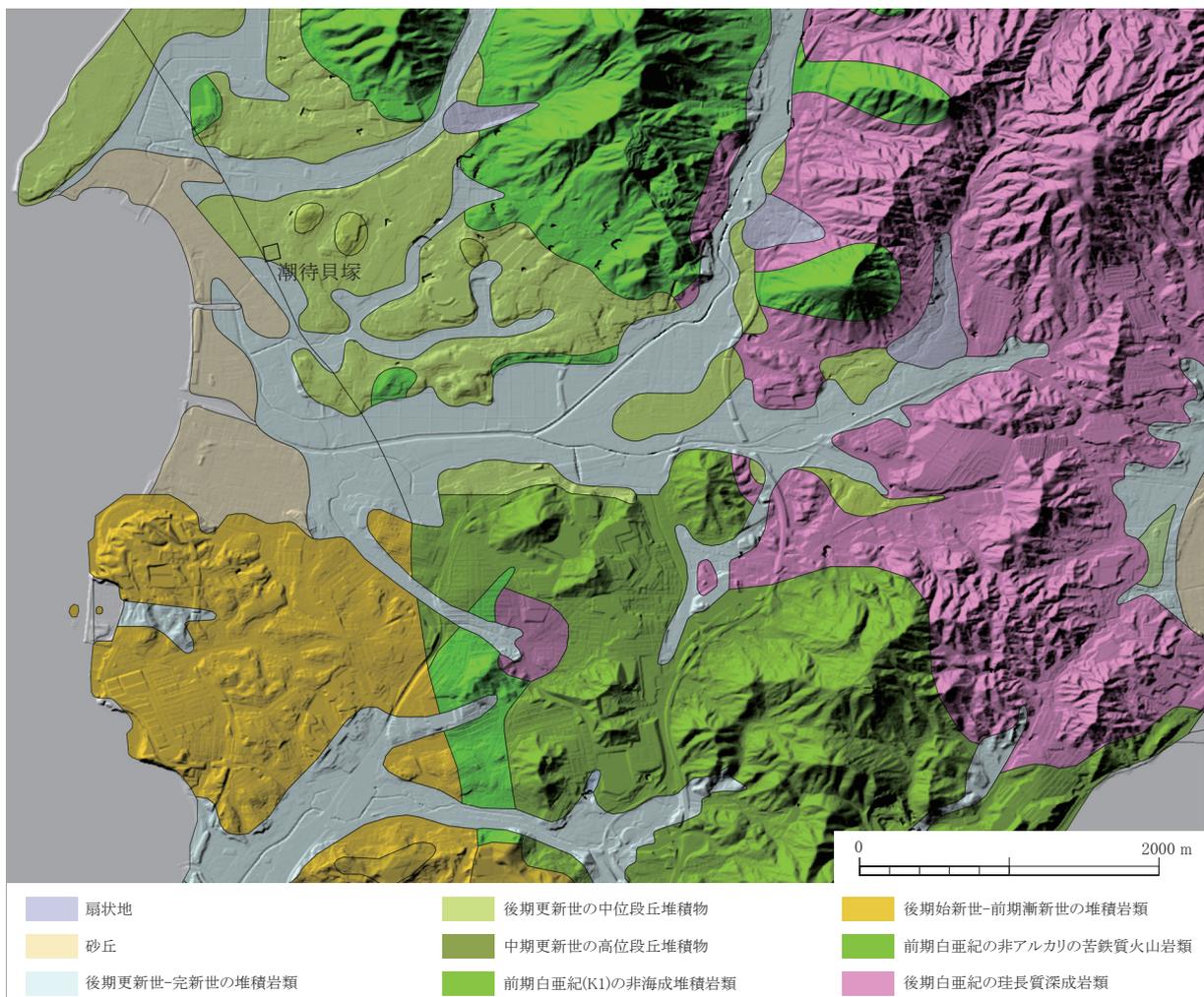


図12 潮待貝塚周辺地形分類図

(産総研地質調査総合センター 20万分の1日本シームレス地質図および  
国土地理院発行の基盤地図情報数値標高モデルより作成)

## 第2項 歴史的環境

潮待貝塚の周辺では、旧石器時代より活動の痕跡が残されており、綾羅木郷台地遺跡などで石器が出土している(図13)。縄文時代初期の遺跡は確認されていないものの、縄文時代前期になると梶栗浜遺跡、神田遺跡などで土器が出土する。居住痕跡は確認されていないが、縄文時代前期には当地域のおそらく汀線付近での居住が活発化したものと考えられる。縄文時代中期の遺物はほとんど確認されておらず、潮待貝塚、神田遺跡、延行条里遺跡などで、客体的に土器片が出土する程度である。後期にいたり、潮待貝塚、神田遺跡をはじめとする遺跡が砂堆上に形成され、出土遺物量が増加する。特に、神田遺跡では大型の土坑群が検出されており、居住形態の変化がうかがわれる。後期前半に海岸部での居住活動が活発化する一方、延行条里遺跡では沖積段丘面で後期後半の居住域が確認されており、晩期にかけて居住域が綾羅木川周辺微高地へ移動していく様子が読み取れる。畦畔や水路の存在は低地部における耕作が開始されたことをうかがわせる。

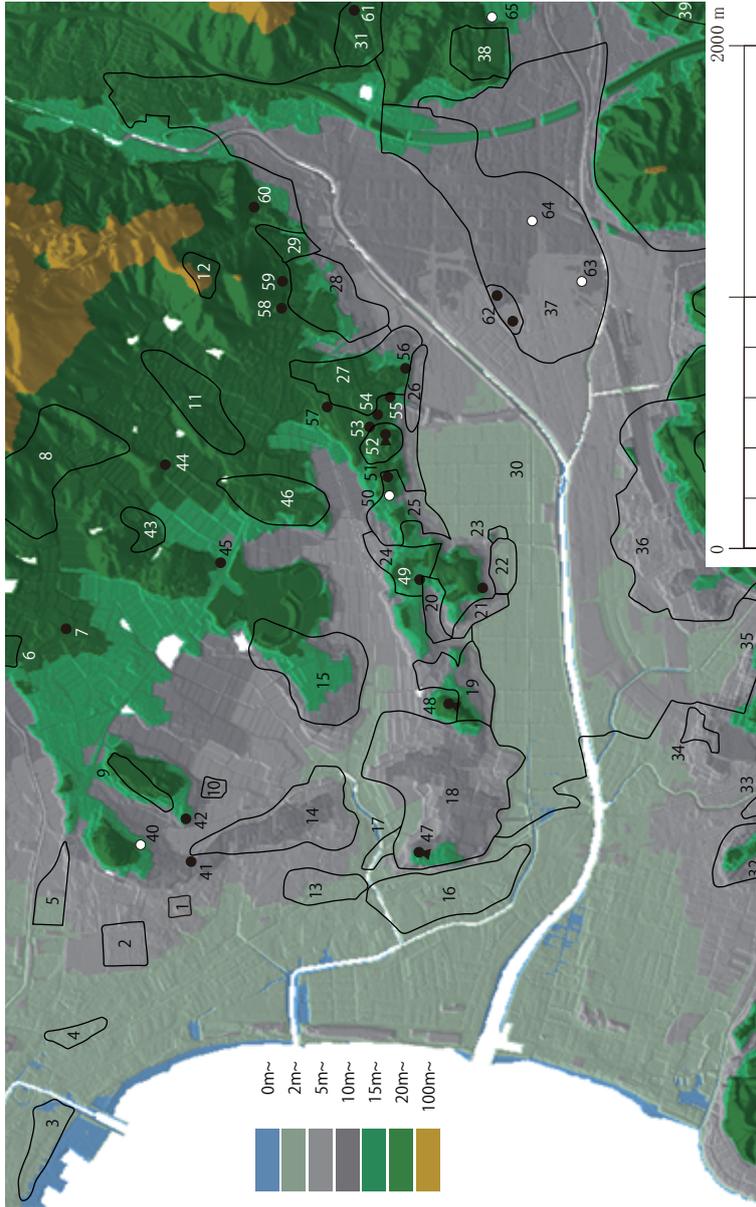
この綾羅木川右岸に細長く伸びる台地上は、その後も遺跡が営まれ、重要な活動拠点となっている。弥生時代前期には綾羅木郷台地遺跡に大規模な集落が形成され、さらに伊倉遺跡、秋根遺跡が綾羅木川の左岸にも展開していく。

弥生時代の集落が展開した台地上は、綾羅木郷台地遺跡、伊倉遺跡、秋根遺跡などで、古墳時代にも集落が形成されている。仁馬山古墳をはじめとする古墳の大多数は、綾羅木郷遺跡ののる東西に細長くのびる台地上に密に分布している。後期には河岸段丘上や丘陵の裾部にも小規模な古墳群が展開する。

古代には沖積低地の灌漑設備が整えられるとともに、秋根遺跡にみられるように当該地域に官衙的性格の遺跡があらわれる。古代末までに延行条里遺跡で確認されたような条里区画が整備され、現在に至るまでの土地利用の基礎が成立した。

### 【註】

1) 図12・13の地図作成にあたっては、『QGIS Version 2.10.1』を利用した。



- 1：潮待貝塚 2：神田遺跡 3：東条遺跡 4：安岡駅構内遺跡 5：安岡胡麻田遺跡 6：蒲生野郷遺跡  
 7：墓の下遺跡 8：横田遺跡 9：富任人幡宮遺跡 10：三太屋敷 11：上有富遺跡 12：ハンドウ山遺跡  
 13：榎栗浜遺跡 14：稲栗遺跡 15：引田遺跡 16：打越遺跡 17：綾羅木馬場遺跡 18：綾羅木郷台地遺跡  
 19：重武屋敷遺跡 20：駅ノ上遺跡 21：歌遺跡 22：幸地ヶ森遺跡 23：丸小山遺跡 24：岡遺跡  
 25：延行郷遺跡 26：八幡遺跡 27：下有富遺跡 28：塚の原遺跡 29：石原遺跡 30：延行条里遺跡  
 31：形山遺跡 32：高山古屋敷遺跡 33：稗田遺跡 34：要須遺跡 35：稗田道祖遺跡 36：伊倉遺跡  
 37：秋根遺跡 38：坂磯遺跡 39：斎の泉遺跡 40：官林山古墳 41：友則古墳 42：茶臼山古墳  
 43：三郎山古墳群 44：王子権現山古墳 45：一升塚古墳 46：法蔵寺古墳群（遺跡） 47：若宮古墳  
 48：上の山古墳 49：岡古墳 50：奥の屋敷石棺群 51：奥の屋敷古墳群 52：仁馬山古墳群 53：上ヶ原古墳  
 54：榎松古墳 55：観音堂古墳 56：有富下方古墳 57：下有富古墳 58：有富古墳群 59：小原山古墳  
 60：石原古墳群 61：形山古墳 62：秋根古墳群 63：塚本古墳 64：市屋敷古墳 65：秀波古墳群

図13 潮待貝塚周辺遺跡分布図

(国土地理院発行の基盤地図情報数値標高モデルおよび濱崎ほか、2010 挿図1より作成)

## 第2節 潮待貝塚の調査

### 第1項 第1次調査

山口大学埋蔵資料館には、潮待貝塚出土資料が収蔵されている。本貝塚は、縄文時代の貝塚分布が稀薄な中四国地方にあって、生業や居住に関する重要な情報を有する遺跡と考えられる。今回報告する資料が当資料館に収蔵された記録は残されていないものの、当時山口大学に勤務し、発掘調査に携わった小野忠熙氏により収蔵されたものと思われる。潮待貝塚は1950年に、山口大学・山口県教育委員会・下関市教育委員会による共同調査がおこなわれ、1961年に山口県教育委員会・下関市教育委員会による第2次調査がおこなわれた。調査成果については小野忠熙(1961)、小野忠熙・潮見浩(1961)、吉村次郎(1965)による概報に記載されており、これらをまとめた内容が『山口県史』に掲載されている(伊東2000)。下関市立考古博物館所蔵資料については、澤下(2000・2003)による報告がある。筆者は第26回中四国縄文研究会において、当資料館所蔵の潮待貝塚出土資料を一部紹介した(川島2015)。詳細な報告がなされていないため、出土遺物量の具体的な内容は不明であるが、第2次調査における出土土器が4,000~5,000点という記述がある(小野1964、吉村1965a)。下関市立考古博物館には土器・石器を中心とする出土遺物の大部分が収蔵されているとみられるのに対し、当資料館の収蔵品は若干の土器・石器・貝製品があるものの、大半は貝殻、土壌サンプルが占めている。これらのうち、今回は土器・石器・貝製品を報告する。

当貝塚では2地点において貝塚が確認されている。A・B地点とされた地点貝塚は、それぞれ窪地をさき40mほど離れて形成されている(図14)。潮待貝塚の現況は宅地となっており、当時の地形をうかがうことはできない。測量図をみるかぎり、調査時の窪地と貝塚との比高差はわずかであるが、貝塚形成当時は比高差がより大きかったものと考えられる。また、貝塚は微高地から窪地への傾斜面に形成されていることがわかる。貝塚形成をうながす投棄行為が洪積層の上部からおこなわれたとすると、居住域はその背後に推定することができるだろう。貝塚形成が同時進行であったかどうかは定かでないが、両地点貝塚はどちらも後期前半から中葉にかけて形成されたと考えられている(吉村1965a)。B地点貝塚の範囲は楕円状を呈し、長軸約6mをはかる。以下、既報告に記載されている第1次・第2次調査の概要を整理する(川島2015)。

第1次調査では、以下の動物遺存体が出土している(吉村1965a)。貝類では、アサリ・ハマグリ・チョウセンハマグリ・シオフキ・オキシジミ・バイなどが多く、鹹水産の貝

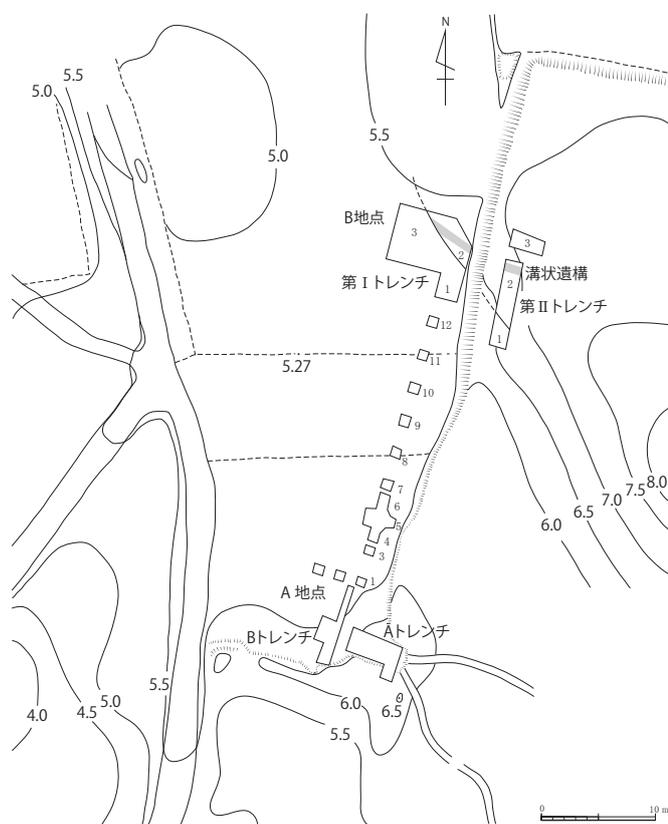


図14 潮待貝塚トレンチ配置図(吉村1965第16図を再トレース)

類が主体をなす。ほかに、サルボウ・アワビ・カキ・ニシ・シラガイ・コブシガイ・サザエ・シリタカニイナ・イシブタニイナ・ヤマトシジミ・ミスジカワニナなどが出土している。陸棲貝類は極めて少ないとされる。魚類ではタイ・アカエイなどが、甲殻類ではアカフジツボが出土し、棘皮動物類ではウニ類が出土している。哺乳類ではイノシシ・シカ・イヌが確認され、小禽類も出土しているという。植物遺存体はシイの実が1点出土している。

第1次調査A地点での層序は、遺物を含む約30cmの表土(砂層)、薄い黄白色砂層の下に、遺物包含層となる黒色砂層(0.8~1.4m)が堆積している。貝層は黒色砂層の下部に形成され、厚さ30~60cmの塊状やレンズ状に堆積する。これらは土坑などに堆積していた可能性があろう。出土した貝類の主体は砂底性であり、その採取地点は潮待貝塚西方に広がる海岸と考えてよいだろう。岩礁性の貝類についても周辺数km以内の岩礁域で採取可能であったと考えられる。

B地点では、約20cmの砂層(耕土)の下に、貝殻と遺物を含む茶褐色砂層が35~40cm堆積していた。この下部に、微量の遺物を含む暗茶褐色の滲透層、黄白色砂層が堆積しており、これらの層は西南・西方向に低く傾斜している。B地点第3号トレンチ北西部では層序が異なり、表砂層の下に炭化物を含む約15cmの硬くしまった焦茶色砂層があり、その下部が礫を含む硬い洪積層である。洪積層は比較的平坦であり、B地点は洪積層の末端部分にあたる。第3号トレンチにおいて、洪積層を掘り込んで形成された、幅80cm、深さ85cmの溝状遺構が検出された。この遺構は第2次調査で延長部分が検出され、その下部でさらに1条の溝状遺構が検出された。

## 第2項 第2次調査

第2次調査では第1次調査A・B地点の拡張部が調査され、A・B地点間に1m四方の試掘坑が7個設定された(図14)。調査区設定図をみるかぎり、これらの試掘坑の幾つかはさらに拡張されているようである。A地点では東西方向に2m四方のトレンチが3つ設けられた。南西部では、暗茶褐色砂層が60cm、厚さ約20cmのレンズ状に堆積した貝層を含む約30cmの黒色遺物包含層、淡灰黄色砂層という層序を示す。土層は南または西側に傾斜している。淡灰黄色砂層の上面より30cmの範囲から阿高式の小破片3点および無文の土器片4点が出土した。貝層は西側の斜面のみに形成されたようである。

B地点では、第1次調査区の北側に調査区が拡張されるとともに、東側にも第IIトレンチが設けられた。第I・IIトレンチともに、北側の洪積層上において遺物が多く出土した。洪積層の末端は第Iトレンチの中央から北側で検出され、傾斜変換線付近まで広がっている。第Iトレンチ北部の洪積層上には、炭化物・土器片を含む硬くしまった焦茶色砂層が薄く形成されている。貝層は傾斜変換線の南西部に形成されており、時期は縄文時代後期前半から中葉と考えてよいだろう。小野(1961)の報告によれば、最初の溝状遺構(下溝)が掘削された当時、段丘の下には低湿地が広がっており、その後段丘面まで砂が堆積し砂堆地形となったとされる(図15)。この淡黄色砂層は微量の土器を含んでおり、下溝を覆っている。先述した第1次調査で検出された溝状遺構(上溝)はこの後に掘削され、検出面の幅78cm、底面の幅52cm、深さ54cmをはかり、断面は逆台形状を

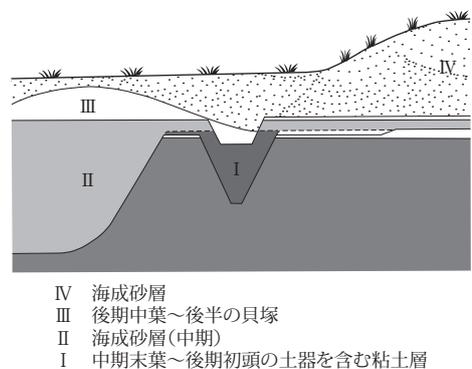


図15 潮待貝塚B地点第Iトレンチ土層断面模式図

(吉村 1965 第18図を再トレース)

呈する(図16)。上溝は貝塚を切っており、底部に貝塚の末端が流れ込んでいることから、貝塚と同一時期に形成されたと考えられている。ただ、断面図や写真で土層の堆積状況が確認できないため、正確な時期については明らかとはいえないだろう。縄文時代中期の遺物を少量含む淡黄色砂層に覆われた下溝は、検出面の幅80~85cm、底面の幅22~30cm、深さ約95cmをはかり、断面はV字状となる。第Iトレンチでは下溝の末端部からは、縄文時代中期から後期前半の土器などの遺物を含む暗茶褐色粘土が検出された。底面から45cmの高さ

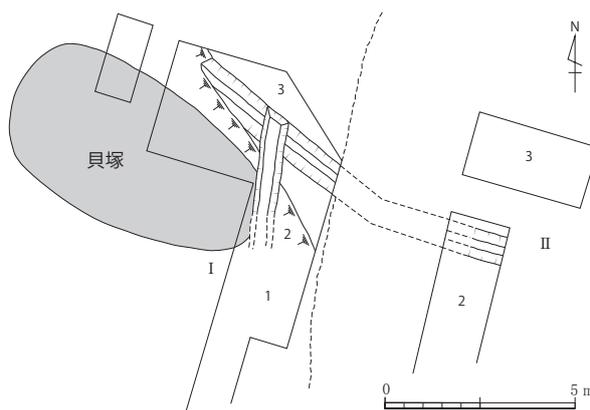


図16 潮待貝塚B地点  
(小野1961第68図を再トレース)

までは地下水によりグライ化が認められる。第IIトレンチでも同様の溝状遺構が検出されており下溝の一部と考えられているが、第Iトレンチと異なり、埋土は粘土質ではなく砂質である。

出土した土器には、阿高式など縄文時代中期末の土器が若干含まれるが、主体は後期初頭から中葉にかけての中津式、福田K2式期、津雲A式、鐘崎式となっており、晩期の土器はわずかに出土している。これまでしばしば言及されてきたとおり、土器においても中部瀬戸内の・九州的要素の混在が本地域の特徴といえよう。石器はひと通りの器種が出土しており、石斧・石鏃・石錘・石皿・砥石・敲石などがみられる。石器の出土量は特に多いとは考えられず、また器種間の偏りはみられない。

住居跡・土坑などの遺構は確認されていないものの、小規模ながらも貝層が形成されていることから、完全な定住とはいえないまでも反復的に利用された場所であると考えられる。遺構の可能性が残されているのが、第2次調査の際にA・B地点間で検出された、硬くしまった茶褐色砂層である(小野1961a)。上面に薄く粘土が貼られ、焼石・小石・土器片が出土したことから、調査時には住居跡の可能性が指摘されていた。しかし、柱穴が確認されないなど詳細が不明なため、住居跡とは認定されていない。

### 第3項 山口大学埋蔵資料館所蔵潮待貝塚出土資料

#### 1. 土器

図17-1~10は縄文土器片である。10を除き、「シオマチ」または「潮待貝塚」とのみ注記されていることから、発掘出土品ではない可能性がある。実測図はないものの、潮待貝塚出土資料として写真が掲載されたり(小野1985;1986)、当資料館のリーフレットで紹介されたことがある(山口大学埋蔵文化財資料館2001)。10は寄贈資料であり、添えられたラベルによると表採されたものと考えられる。11はSiBⅢ溝中貝層の注記があるため、発掘調査の出土品である。

1は波状口縁の口縁部片で、波頂部に半円状の隆帯が付される。内面はヘナタリによるナデである。2~5は磨消縄文を有する。2はRL縄文が施された口縁部である。直線的に立ち上がる口縁部で、内面はヘナタリによるナデが施される。3は波状口縁の口縁部である。ヘナタリによる擬縄文が施され、内面はヘナタリによって調整される。沈線は深く、波頂部下にJ字状の区画文が描かれる。4は波状口縁の口縁部である。RL縄文が施される。5は胴部片で、RL縄文が施される。6・7は沈線文系の口縁部片である。7は緩やかな波状口縁を呈する。8は強く内湾する波状口縁の口縁部片である。内外面ともミガキが施されている。9は口縁部片で、断面が尖唇状となる。10は口縁から胴部まで残存する。波状口縁を呈

し、頸部がくびれる。内外面ともナデを施す。11の外表面はヘナタリで調整され、内面は丁寧なナデを施す。

12～14は表採資料で、潮待貝塚で発見された旨のラベルが添えられていた。注記は3点とも「安岡」となっている。12は長頸壺の胴部片であろう。頸部との接合部から胴部が遺存し、外面にカキ目が施される。赤焼の状態で焼成は不良であり、外面の一部が灰色となるほかは、橙～黄橙色を呈する。破片右端部に、カキ目施文後に縦方向に粘土が貼り付けられている。13・14は土師器皿の底部片である。12の底部には糸切り痕が残る。

## 2. 石器

15は黒曜石製の凹基式石鏃である。石材の色調は黒く、半透明である。16は打製石斧の基部である。裏面に自然面を残す。正面はやや左右非対称となり、側面観は自然面に沿ってわずかに湾曲する。17は赤色頁岩の剥片である。周囲に丁寧な2次調整が施されている。上部に敲打痕、左右の側面には剥離が加えられ、整形の痕跡がうかがえる。18は赤色頁岩の剥片である。19は転礫を素材とする。上部に敲打痕をもち、左右の側面が剥離により整形されている。やや厚みがあるものの打製石斧の未製品であろうか。石材は赤色頁岩である。20は砂岩製の磨石である。側面の約半分以上が敲打され、稜線が形成される。表裏ともに明瞭な擦痕は認められない。21は磨石で、出土地点の異なる3片が接合した資料である。側面、表裏面に敲打痕を残す。22は砂岩製の砥石である。研磨面を3面有する。23は砂岩製の石皿である。扁平な転石を半裁したような形状で、側面に調整が施される。自然面側に複数の窪みが残されており、打撃をともなう作業に用いられたと考えられる。正面に、明瞭な擦痕や、典型的な石皿が有す

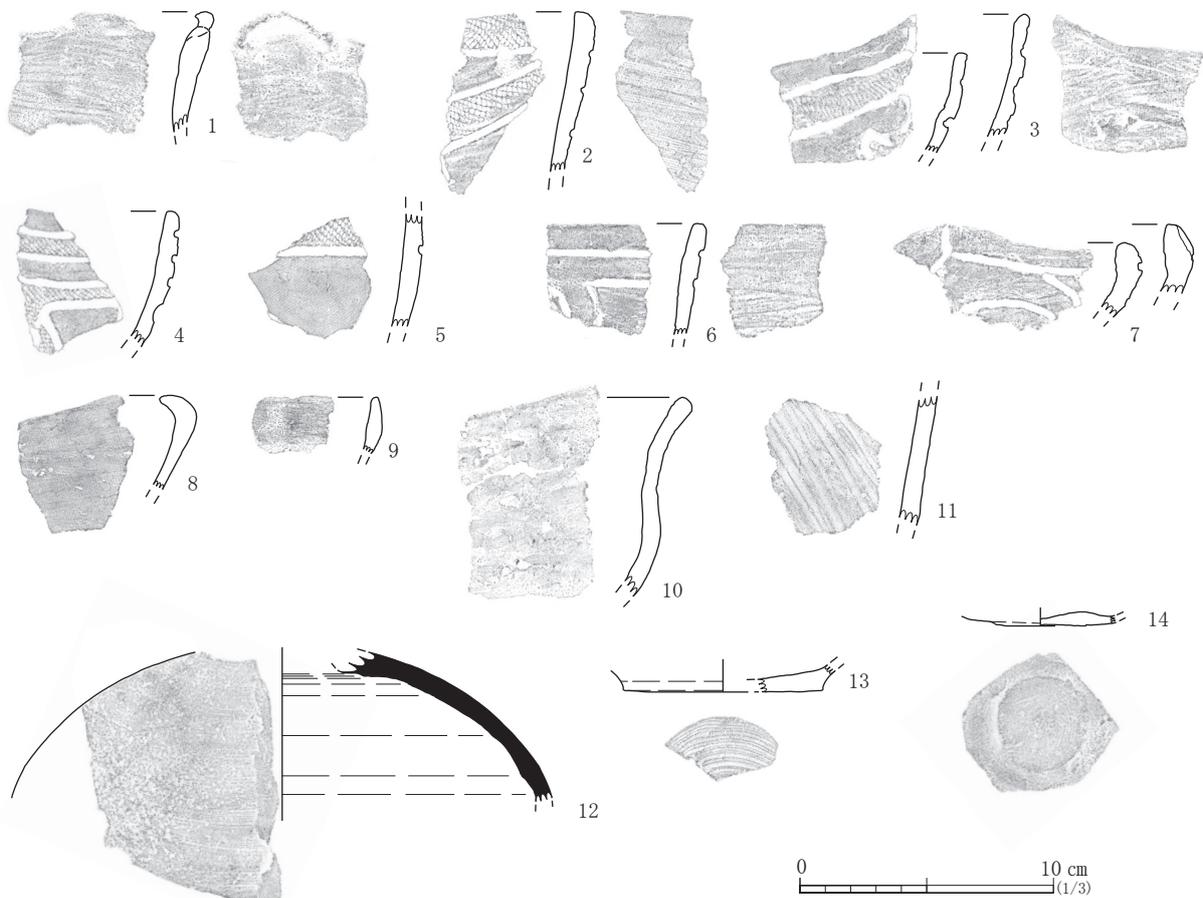


図17 潮待貝塚出土遺物実測図①

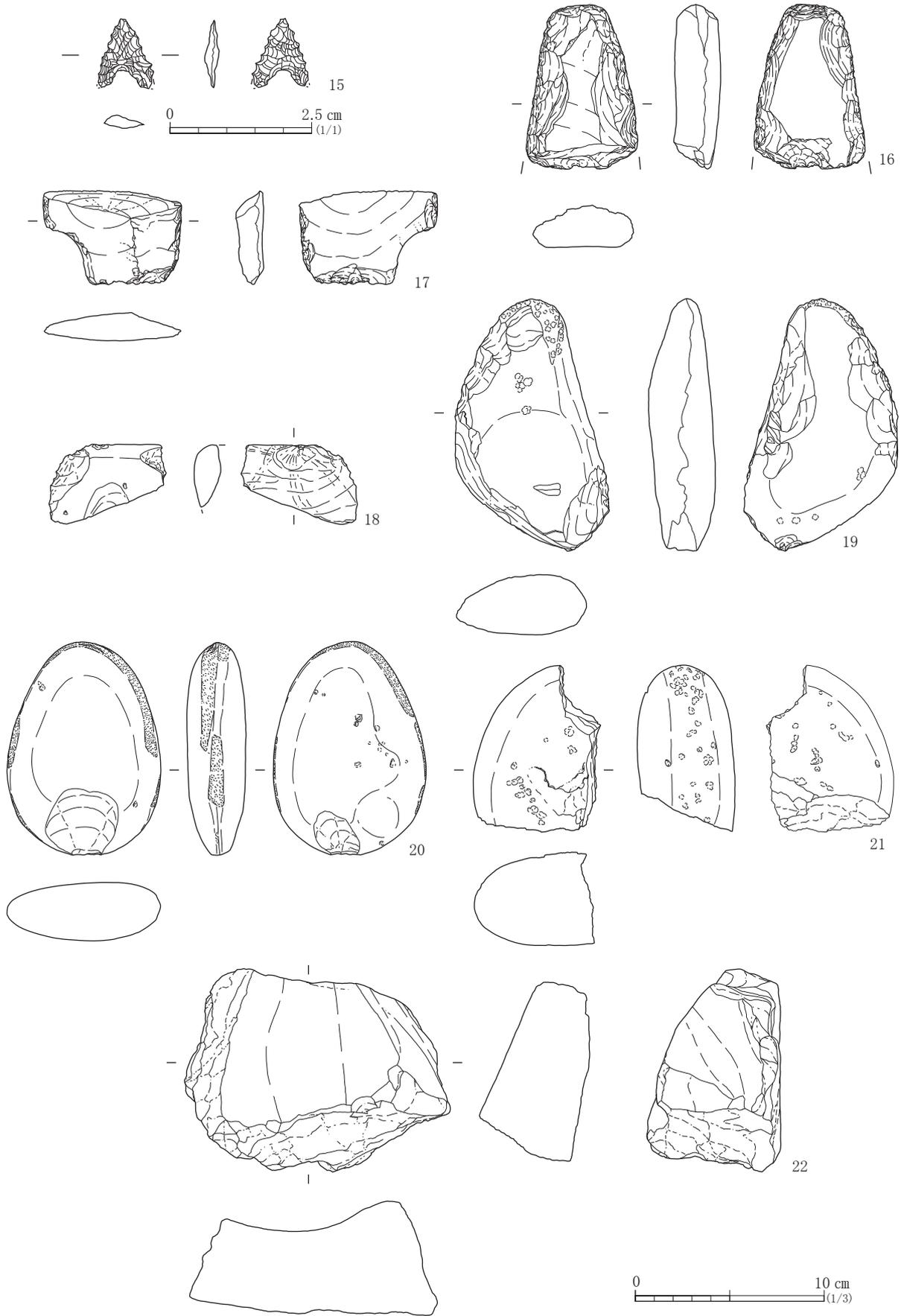


図18 潮待貝塚出土遺物実測図②

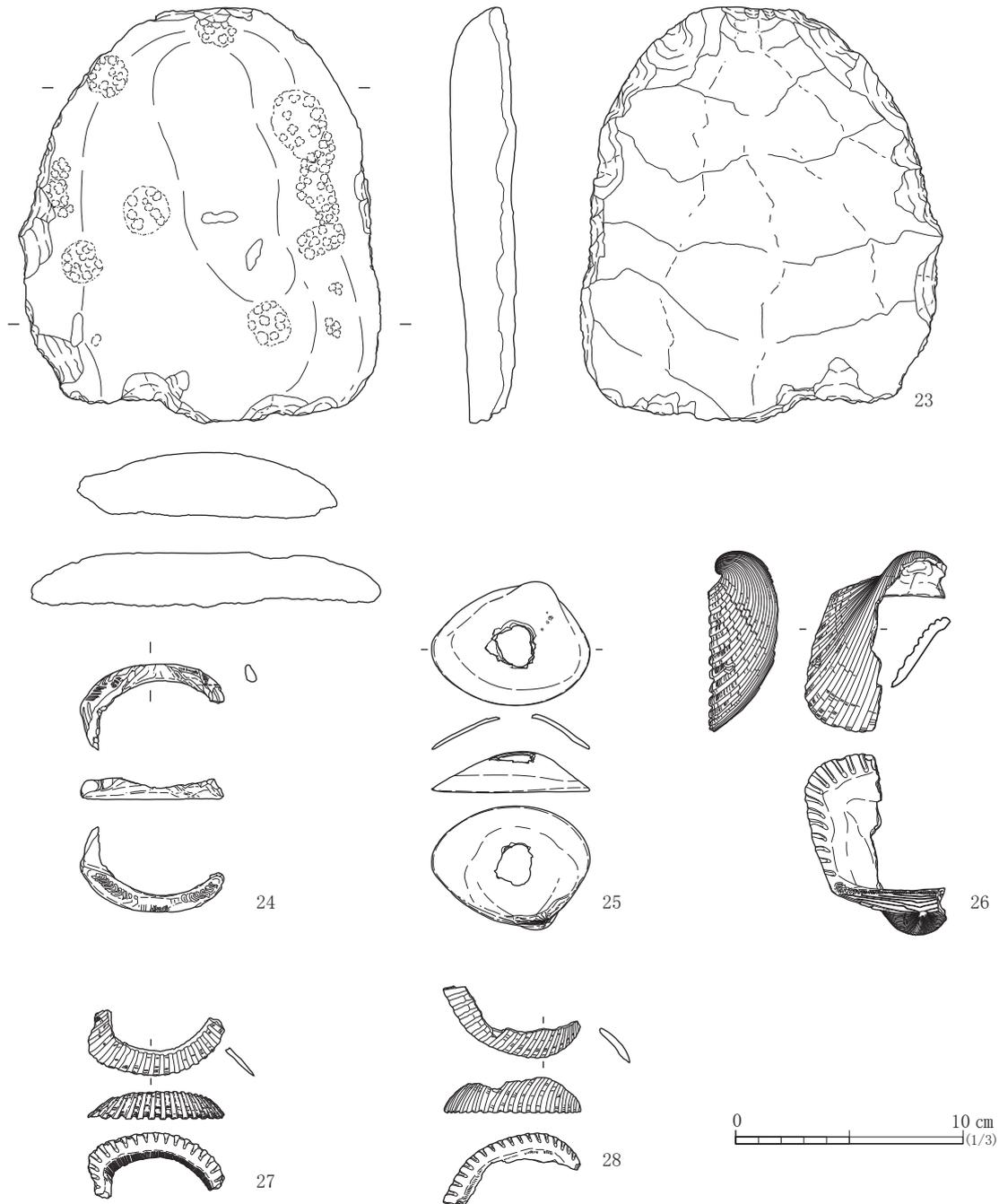


図19 潮待貝塚出土遺物実測図③

るような窪みはみられない。

### 3. 貝製品

24はベンケイガイ製の貝輪である。研磨面を良好に残す。25はハマグリで、中央部に敲打による穿孔が施されている。26～28の素材はフネガイ科であり、加工された可能性がある。26は拡張部から中央付近にかけて穿孔が試みられたものと考えられる。27は研磨されていないものの、敲打により貝輪状に整形されている。27・28も腹縁部を残し、加工されていると考えられる。これらは、潮待貝塚出土二枚貝類でも大型の資料である。

表3 潮待貝塚出土遺物(土器)観察表

法量( )は復元値

遺物番号	注記	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考
					①外面	②内面		
SIO 1	シオマチ	縄文 深鉢	口縁部		①にぶい黄色(2.5Y6/3) ②オリーブ褐色(2.5Y4/4)		粗:0.5~2mm φの砂粒を多量に含む	
SIO 2	不明	縄文 深鉢	口縁部		①暗灰黄色(2.5Y4/2) ②黄褐色(2.5Y5/4)		粗:0.2~1.5mm φの砂粒を含む	
SIO 3	シオマチ	縄文 深鉢	口縁部		①灰黄褐色(10Y4/2) ②黄褐色(2.5Y5/4)		粗:0.5~1mm φの砂粒を含む	擬縄文
SIO 4	シオマチ	縄文 深鉢	口縁部		①オリーブ灰色(5Y5/2) ②黄褐色(2.5Y5/3)		密:0.5~2mm φの砂粒を極僅かに含む	
SIO 5	シオマチ	縄文 深鉢	体部		①にぶい黄褐色(10YR5/4) ②灰黄褐色(10Y5/2)		良:0.5~1mm φの砂粒をわずかに含む	18.08g
SIO 6	シオマチ	縄文 深鉢	口縁部		①にぶい黄色(2.5Y6/4) ②黄褐色(2.5Y5/4)		良:0.5mm φの砂粒を含む	
SIO 7	シオマチ	縄文 深鉢	口縁部		①灰黄褐色(10Y4/2) ②黄褐色(2.5Y5/4)		粗:1~2.5mm φの砂粒を多量に含む	
SIO 8	シオマチ	縄文 深鉢	口縁部		①オリーブ褐色(2.5Y4/4) ②黄褐色(2.5Y5/4)		良:0.5~1mm φの砂粒をわずかに含む	
SIO 9	潮待貝塚	縄文 鉢	口縁部		①にぶい黄褐色(10YR5/4) ②にぶい黄色(2.5Y6/4)		粗:1~2.5mm φの砂粒を多量に含む 多量に含む	
SIO10	潮待	縄文 深鉢	口縁部		①②黄褐色(2.5Y5/3)		粗:2.5~5mm φの砂粒を多量に含む	
SIO11	SiBⅢ溝中貝層	縄文 深鉢	体部		①淡黄色(2.5Y8/3) ②にぶい黄褐色(10YR6/4)		粗:0.5~1.5mm φの砂粒を含む 0.5~1.5mm φの雲母片を含む	26.64g
SIO12	安岡	須恵器 壺	体部		①灰色(7.5Y4/1)~ 橙色(7.5YR6/6) ②にぶい黄褐色(10YR6/4)		密:0.5~1.5mm φの砂粒を少量含む	
SIO13	安岡	土師器 皿	底部	②(5.9)	①②にぶい黄褐色 (10YR6/4)		密:0.5~1mm φの赤色砂粒を極わずかに含む	糸切り痕
SIO14	安岡	土師器 皿	底部	②(6.3)	①にぶい黄褐色(10YR6/4) ②橙色(7.5YR6/6)		良:0.3~1mm φの白色砂粒を少量含む 2mm φの灰白色砂粒をわずかに含む	糸切り痕

表4 潮待貝塚出土遺物(石器)観察表

法量( )は残存値

遺物番号	注記	器種	法量(mm)				石材	備考
			①長さ	②幅	③高さ	④重量(g)		
SIO15	なし	石鏃 凹基	①11.8	②(9.4)	③2.6	④0.18	黒曜石	収蔵品目録には「間層」
SIO16	Si A5 貝	打製石斧	①(87.7)	②(59.2)	③(22.6)	④157.20	砂岩	硬質の灰白色物質付着
SIO17	Si-A3	二次調整のある剥片	①(50.1)	②73.2	③15.4	④61.73	赤色頁岩	
SIO18	Si ABT	剥片	①(60.9)	②42.7	③14.5	④37.36	赤色頁岩	
SIO19	B第2T Ⅲ	不明	①133.1	②81.5	③32.9	④425.59	赤色頁岩	
SIO20	なし	磨石	①(113.6)	②81.2	③31.6	④440.60	砂岩	収蔵品目録には「間層1」
SIO21	A1・A3	磨石	①(89)	②(63.5)	③52	④368.80	花崗岩	A1(1点)、A3(2点)が接合
SIO22	Si A5	砥石	①(109)	②140.5	③71	④901.0	砂岩	
SIO23	Si B溝、溝中	石皿	①184	②159.5	③27.6	④1134.0	砂岩	

表5 潮待貝塚出土遺物(貝製品)観察表

法量( )は残存値

遺物番号	注記	器種	法量(mm)				素材	備考
			①殻長	②殻高	③高さ	④重量(g)		
SIO24	シオマチ	貝輪	①(63)	②(38)	③(9.5)	④7.90	タマキガイ	
SIO25	A2	貝輪未製品か	①69.2	②54.0	③17.9	④15.52	ハマグリ	
SIO26	不明	貝輪未製品か	①(62.2)	②(79.1)	③(30.1)	④30.01	フネガイ科	
SIO27	SiA3	貝輪未製品か	①(60.3)	②(30.6)	③(12.4)	④5.17	フネガイ科	
SIO28	A2	貝輪未製品か	①(60.4)	②(31.9)	③14.8	④5.35	フネガイ科	



写真11 潮待貝塚出土遺物①



写真12 潮待貝塚出土遺物②



写真 13 潮待貝塚出土遺物③



写真 14 潮待貝塚出土遺物④

#### 第4項 出土遺物についての若干の検討

以上が、当資料館で所蔵し、図化可能な資料である。これらの資料について、既報告と比較し、若干の検討を加えておく。土器に関しては、前述のようにこれらの土器片には出土層位の注記がないことから、表採資料である可能性が高い。これらはほぼ縄文時代後期初頭から前葉にかけての土器とみられ、過去の報告との齟齬はみられない。5・11は下吉田遺跡(北九州市)で多量に出土した土製円盤(メンコ)の可能性もある。側面は研磨されていないが、円形に整形されているように見受けられる。今回は点数が少ないので、当資料館所蔵以外の潮待貝塚出土資料でも確認する必要がある。

石器については、特出する器種はなく、縄文時代遺跡に普遍的にみられる石器が少量ながら確認できた。海岸部に立地するものの、石錘などの多量性は認められない。石材として、赤色頁岩がやや目立つが、砂岩系の石材も多く利用されている。

このほか、ベンケイガイ製の貝輪が出土しており、また敲打痕をとまなう貝殻が出土していることから、当貝塚でも貝輪の製作がおこなわれた可能性がある。素材は付近の海岸で調達できたと考えられる。ただ、今回報告した資料は、大型の二枚貝に加工痕が施されたものであるが、顕著な研磨痕をもつ24以外は明確に貝輪の未製品と断定することが難しい。24の内周の最大径は約5cm程度にはなると推定されるが、25・27・28はそれよりも径が小さくなると考えられる。阿部・金田(2013)は貝輪の着脱実験をおこない、他人の補助を受ける「補助装着」の方法によって、これまで想定されてきた装着可能内周長より小さな資料であっても装着が可能であることを示した。この「補助装着」の方法をとった場合、成人女性でも内周長が155mmの貝輪の着脱が可能であったことが報告されている。24の内周長は約160mmと推定されるので、<sup>註1</sup>手首の径には個体差があったであろうが、成人女性でも着脱ができたと考えられる。したがって、当貝塚における敲打痕をもつ貝殻は、小破片であり必ずしも大型の貝殻とは断定できないものの、貝輪の未製品である可能性を残している。

## 第5項 遺物の出土位置

前述のように、今回報告する土器については出土地区・層位を示す注記はなされていない。図化できない土器資料も含めて、限られた情報のため誤認もあるかもしれないが、注記による遺物の出土位置について記しておく(表6)。

石器の注記をみると、第2次調査時の出土資料を含んでいることがわかる。18の「SiABT」は、第2次調査で設けられたA・B地点間の試掘坑を示すと考えられる。19には「B第2T Ⅲ」と記されているが、B地点第2次調査における第Ⅱトレンチの3区と理解してよいだろう。11の「SiBⅢ溝中貝層」は、溝と記載されているのでB地点であることは間違いない。B地点に第Ⅲトレンチがないため、第1次調査の出土資料だとすれば(小野1964:67)、B地点の第3号トレンチであろう。

石斧(16)の注記に「Si A5 貝」とあるが、AB地点間に貝層の分布は報告されていないため、A地点のグリッドか層位を示すものであろう。これは、AB地点間の試掘坑が12まで番号をふってあるのに対し、A5までしか注記が確認できないことと整合性がある。そうだとすれば、「SiA～」または「A～」という注記はA地点の資料である可能性が高い。もっとも、遺物が出土しなかったり、出土していたとしても当資料館でそれらの資料を所蔵していないためであることも考えられる。今後、下関市考古博物館の資料や図面類と照合しながら、整理をおこなう必要がある。

このほか、今回報告しない資料の注記を列举すると、A地区Ⅲ、ⅣA地区、BⅠ貝層直下、SiBⅠ3西拡旧溝中貝層、B第2T表土、BⅡ区溝中、BⅡⅢ溝中貝層、BⅢ溝中包含踏かため層、SiBⅢ、SiBⅢ溝中貝層、西部BⅢ拡大部旧溝中貝層、SiA3、SiA2、SiA5、SiA4、A1 2T、A1 6T、間層1、間層1貝4地区、などが確認される。

### 【註】

1) 内周長の計測には、同様な形態の貝輪実測図と比較したうえ、Illustratorを利用し、デジタルトレース図の内周パス長を表示させ算出した。

表6 出土遺物注記一覧

遺物番号	注記	遺物番号	注記	遺物番号	注記
1	シオマチ	11	SiBⅢ溝中貝層	21	A3(2点)、A1(1点)が接合
2	不明	12	安岡	22	Si A5
3	シオマチ	13	安岡	23	Si B溝、溝中
4	シオマチ	14	安岡	24	シオマチ
5	シオマチ	15	なし(収蔵品目録には「間層」)	25	A2
6	シオマチ	16	Si A5 貝	26	不明
7	シオマチ	17	Si-A3	27	SiA3
8	シオマチ	18	Si ABT	28	A2
9	潮待貝塚	19	B第2T Ⅲ		
10	潮待	20	なし(収蔵品目録には「間層1」)		

### 第3節 周辺遺跡との関連からみた潮待貝塚

中四国地方の中でも山口県域は貝塚の少ない地域であり、山口県内では潮待貝塚および神田遺跡の2遺跡からのみ貝塚が検出されている。神田遺跡は、潮待貝塚より北西に約200mしか離れておらず、潮待貝塚と同時期の遺物が出土している(河村2000、幸泉2009)。このため両遺跡を本来同一の遺跡とみなす見解もある(山本2005)。潮待貝塚の性格や当該時期の地域性を明らかにするためには、神田遺跡との比較をおこなうことが有効であると考えられる。

神田遺跡は6次にわたり発掘調査がおこなわれており(小野ほか1971、小野ほか1972、池永ほか1973、山本・柿本1974、中村・柿本1977、渡辺1979)、このうち第1次調査では貝塚、貯蔵穴状の土坑、住居跡状の遺構、墓域が検出され、縄文時代前期から後期の土器、石器、土偶、人骨、垂飾などが出土した。中期の土器は少ないものの潮待貝塚より出土量が多く、前期の土器も比較的まとまっている点が潮待貝塚と異なっている。近年、幸泉(2009)により神田遺跡土坑出土の縄文時代後期土器の位置づけが検討されている。第4次調査において、Cトレンチの茶褐色土層より貝塚の一部が検出され、貝塚が後期中葉を主体として形成されたことが判明した。第4次調査では、石器製作跡と考えられた集積遺構も検出されている。貝塚をはじめ、石器集石遺構・墓域・捨て場は洪積台地下方の砂堆上に形成されている。これらを総合すると、土坑群が検出された地区を含め、神田遺跡における縄文時代後期の居住域は発掘調査で明らかとなった洪積台地の推定範囲にほぼ相当すると考えてよいだろう(図20)。砂堆上は、捨て場のような場所として機能していたと考えられる。

潮待貝塚における2ヶ所の貝塚のうち、B貝塚については神田貝塚と同様に洪積台地の直下に形成されている。A貝塚はレンズ状や塊状の小規模な貝塚ではあるものの、A地点の独立した高まりの西側に傾斜する緩斜面に形成されている(小野1964:68)。また、貝塚は黒色の遺物包含層内に部分的に形成されていたことから、捨て場のような性格を有していたことが考えられる。したがって、潮待貝塚の調査区には含まれていないが、洪積台地上に居住域が確保されていたものと考えられる。

潮待貝塚における2ヶ所の貝塚のうち、B貝塚については神田貝塚と同様に洪積台地の直下に形成されている。A貝塚はレンズ状や塊状の小規模な貝塚ではあるものの、A地点の独立した高まりの西側に傾斜する緩斜面に形成されている(小野1964:68)。また、貝塚は黒色の遺物包含層内に部分的に形成されていたことから、捨て場のような性格を有していたことが考えられる。したがって、潮待貝塚の調査区には含まれていないが、洪積台地上に居住域を確保していたものと考えられる。

潮待貝塚では縄文時代後期初頭から中葉にかけて、神田遺跡では後期中葉ごろにそれぞれ貝層が形成されていたことから、後期前半における当地域では洪積台地末端での居住活動が一般的であったと考えられる。こうした後期前半の傾向と、後期後半の居住域または生業活動域と

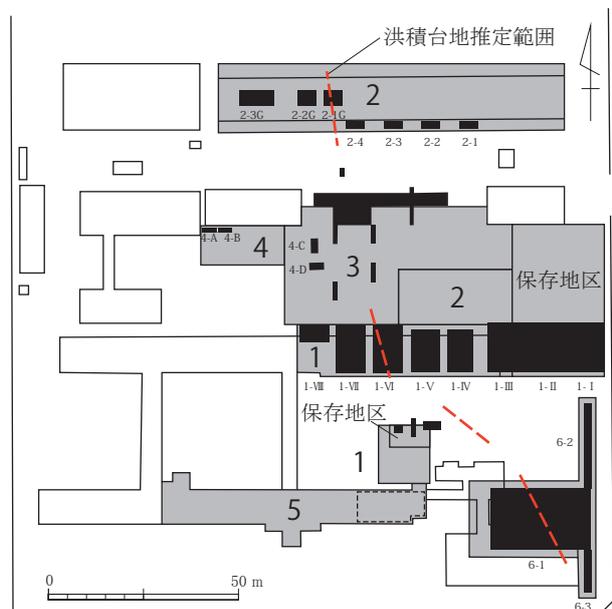


図20 神田遺跡調査区位置図(第1～6次各報告書より作成)

には大きな相違が認められる。延行条里遺跡では、八幡ノ前地区において後期中葉以降の遺物が出土し、洪積台地の下に形成された沖積平野の微高地を活動拠点としていたことが明らかとなっている(藤本ほか2011)。

潮待貝塚・神田遺跡は、山口(2008)のいうIV(中津式)・V(福田KⅡ式)が主体時期となっている。IV・V期は「増加した人口が分散し再び遺跡群を形成し移動を繰り返す時期」(前掲:37)ととらえられている。この分析は中国地方を対象としたものだが、西端に位置する山口県で、なおかつ響灘に面する潮待貝塚周辺の遺跡に適用できるかわからないものの、一般的な傾向を示す指標となるだろう。人口の増減については明らかではないが、神田遺跡と潮待貝塚のように隣接して立地する遺跡が形成されていることを、集団の回帰的な移動が増加したためと解釈すれば、中国地方全般の傾向と一致する。

これまでの概報や、今回の報告資料からは潮待貝塚における居住に関して具体的に知ることは難しいが、一般的な縄文集落より出土する遺物が確認できている。貝輪については確実な資料が2点のみであり、また当遺跡で製作されたとは確定できないが、ベンケイガイ製貝輪が出土していることは当貝塚での居住活動を示しているといえる。石皿・石錘のほか石斧製作に用いられたと考えられる砥石が出土していることも定住的な性格を示す傍証となるかもしれない。遺構がなく、貝塚の詳細が明らかとなっていないため、生業の全体像を復元することは困難であるが、漁労・採貝のほか、狩猟も重要な生業であったと考えられる。背後の山地まで直線距離で約1.5kmであり、石鏃が潮待貝塚全体で約20点確認され、イノシシ・シカなどの獣骨が出土していること、さらにイヌも出土していることは狩猟が生業の重要な一部であったことを示している。

これに対し、潮待貝塚において漁撈に関する資料は、石錘がみられるものの現在のところ確認できる点数は少ない。同様に、神田遺跡でも石錘の出土量は少ないようである。神田遺跡第1次調査出土資料のうち図示された石錘のすべてはⅧ区、つまり調査区西端より出土している。図示されなかった石錘もあると思われるが、4次調査における集石遺構(石器集中地点)および貝塚に近接している点が注目される。神田遺跡における石錘の時期に関しては、おそらく後期以降のものと考えられる。山口県東部では、岩田遺跡・田ノ浦遺跡などにおいて多数の石錘が出土しているが、貝塚は形成されていない。山口県瀬戸内沿岸中央部の遺跡にも貝塚の形成がみられないため、現状では貝塚の形成につながる貝類の採捕は響灘沿岸で活発であったといえる。その要因については、今回報告できなかった貝類資料の分析を通じて当時の環境を復元し、未報告資料の整理を通じて文化的要因も明らかにすることが必要であろう。

潮待貝塚で検出された2条の溝状遺構に関しては、従来原始農耕との関連という視点から言及されてきた(小野1975、吉村1965a)。しかしながら、溝状遺構の詳細な断面図や写真が報告されておらず未検証のままであることに加え、原始農耕の傍証となりうる扁平打製石斧や石皿も大量に出土しているとはいえず、これまでのところこの仮説を積極的に支持する情報は得られていない。

近年、秋根遺跡にて直線的に設けられた断面逆台形状の溝が検出された(濱崎2014)。約20mにわたり、北西-南東方向に直線的に延びている。この溝は、秋根遺跡南側を東西に流れる砂子田川の右岸に位置しており、洪積台地の端部付近に河川に沿う方向で掘削されたものと考えられる。遺物量は少ないものの時期は縄文時代晩期とされ、最大幅150cm、深さ110~120cm、底部の幅は約50cmをはかる。潮待貝塚の溝との断面形態の類似が注目されるが、時期が異なっている。断面の規模を比較すると、潮待貝塚上溝と底部幅が比較的近いものの、検出面での幅は秋根遺跡の方が大きい。検出面での幅については、潮待貝塚上溝は後世の削平を受けていると考えられるため単純には比較できないが、潮待貝塚

の例が縄文時代に掘削されたものである可能性は高くなったといえるだろう。類例・出土遺物が少ないことから両者の関連性の有無を判断できる状況になく、今後の類例の増加を待ちたい。

以上、当資料館蔵の潮待貝塚出土資料の整理を通じて得られた情報について、断片的ながら述べてきた。潮待貝塚は現在宅地化しており、調査によって新たな情報を得ることは難しいと考えられる。そのため過去におこなわれた調査から出来る限り情報を引き出すことが重要であり、調査時の図面や写真類および未報告資料の整理をおこなうことが求められる。今回の報告を足がかりにし、今後も未報告資料を整理することによって、県内縄文遺跡の様相の解明に努めたい。

今回の資料報告にあたり、潮待貝塚出土資料実見の便宜をはかっていただき、遺物・図面についてご教示くださった下関市立考古博物館の澤下孝信氏に深く感謝申し上げます。また、第26回中四国縄文研究会では山口県の貝塚について発表の機会を得、出席者の方々より貴重なご意見・ご指摘をいただいた。土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの沖田絵麻氏には当資料館蔵の貝製品についてご教示をいただいた。末筆ではありますが、感謝申し上げます。

#### 【引用参考文献】

- 阿部芳郎(2007)「内陸地域における貝輪生産とその意味―貝輪づくりと縄文後期の地域社会―」, 駿台史学会(編)『考古学集刊』第3号, 東京
- 阿部芳郎・金田奈々(2013)「子供の貝輪・大人の貝輪―貝輪内周長の計測と着脱実験の成果から―」, 駿台史学会(編)『考古学集刊』第9号, 東京
- 池永孝正・長谷川和美・富士埜勇(1973)『神田遺跡第3次発掘調査概報』, 山口県教育委員会(編), 山口
- 伊東照雄(2000)「潮待貝塚」, 山口県(編)『山口県史』資料編考古1, 山口
- 小川五郎(1955)「山口県下ノ関市潮待貝塚」, 日本考古学協会(編)『日本考古学年報』第3号, 山口
- 小野忠熙(1961)「潮待貝塚」, 山口県教育委員会(編)『山口県埋蔵文化財概要』第4集, 山口
- 小野忠熙(1975)「考古地理学からみた響灘沿岸の砂質海岸の形成」, 日本第四紀学会(編)『第四紀研究』vol.14(4), 東京
- 小野忠熙(1985)『山口県の考古学』, 小野忠熙(編著), 東京
- 小野忠熙(1986)『日本の古代遺跡 30 山口』, 小野忠熙(編著), 東京
- 小野忠熙・潮見 浩(1961)「溝状遺構をもつ縄文遺跡―山口県下関市潮待貝塚第2次発掘調査概要」, 日本考古学協会(編)『日本考古学協会第27回総会研究発表要旨』, 東京
- 小野忠熙・潮見 浩・富士埜勇・山本一郎・伊東照雄・徳富正義(1972)『神田遺跡第2次発掘調査概報』, 山口県教育委員会(編), 山口
- 小野忠熙・富士埜勇・山本一郎・伊藤 彰・永井昌文(1971)『神田遺跡第1次発掘調査概報』, 山口県教育委員会(編), 山口
- 川島尚宗(2015)「山口県の貝塚について」, 第26回中四国縄文研究会四国大会事務局(編)『第26回中四国縄文研究会四国大会 中四国の縄文貝塚発表要旨・資料集成』, 高知
- 河村吉行(2000)「神田遺跡」, 山口県(編)『山口県史』資料編考古1, 山口
- 幸泉満夫(2009)「本州西端域にみる縄文時代後期土器群の器種および文様系統組成―下関市神田遺跡第1次調査区出土土器の再整理を通じて―」, 山口考古学会(編)『山口考古』第29号, 山口
- 澤下孝信(2000)「下関市域出土資料の研究1―下関市潮待貝塚の遺物1―」, 下関市立考古博物館(編)『研究紀要』第4号, 下関(山口)
- 澤下孝信(2003)「下関市域出土資料の研究2―下関市潮待貝塚の遺物2―」, 下関市立考古博物館(編)『研究紀要』第7号, 下関(山口)

関(山口)

産業技術総合研究所地質調査総合センター (2015)『20万分の1日本シームレス地質図』, 産業技術総合研究所地質調査総合センター (編), 2015年5月29日版, 東京

中村友博・柿本春次(1977)『神田遺跡第5次発掘調査概報』, 山口県教育委員会(編), 山口

濱崎真二(2014)『秋根遺跡 山口県下関市秋根南町二丁目地内 秋根遺跡(川久保地区)発掘調査報告書』, 下関市教育委員会(編), 下関市文化財調査報告書37, 下関(山口)

濱崎真二・山内一彦・西中川 駿・久林朋憲(2010)『延行条里遺跡』, 下関市教育委員会(編), 下関市文化財調査報告書27, 下関(山口)

藤本有紀・中原周一・山内一彦・沖田絵麻(2011)『延行条里遺跡(餅田・六ノ坪・八幡ノ前地区) 八幡遺跡 下有富遺跡 観音堂古墳』, 下関市教育委員会(編), 下関市文化財調査報告書32, 下関(山口)

山口大学埋蔵文化財資料館(2001)『山口大学埋蔵文化財資料館収蔵考古資料—出土品にみる山口県の歴史—』, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口

山口雄治(2008)「中国地方縄文時代中・後期の居住形態」, 考古学研究会(編)『考古学研究』第54巻第4号, 岡山

山本一朗(2005)「山口県の縄文乾式貯蔵穴」, 山口考古学会(編)『山口考古』第25号, 山口

山本一朗(2007)「山口県主要縄文遺跡の調査研究略史」, 第18回中四国縄文研究会山口実行委員会(編)『第18回中四国縄文研究会 縄文後晩期の西部瀬戸内地方 発表・集成資料集』, 山口

山本一朗・柿本春次(1974)「神田遺跡第4次発掘調査概報」, 山口県教育委員会(編)『与浦遺跡・神田遺跡』, 山口

吉村次郎(1965a)「潮待貝塚」, 下関市役所(編)『下関市史 原始-中世』, 下関(山口)

渡辺一雄(1979)『神田遺跡第6次発掘調査概報』, 山口県教育委員会(編), 山口



『見島ジーコンボ古墳群第 124 号墳 潮待貝塚 出土資料調査報告』

第 II 章 潮待貝塚出土資料調査報告 正誤表

ページ番号	訂正箇所	誤	正
37	下から 5 行目	ベンケイガイ	タマキガイ科
38	表 5 SIO <sub>2</sub> の素材	タマキガイ	タマキガイ科

館蔵資料調査研究報告書5

見島ジーコンボ古墳群 第124号墳  
潮待貝塚

出土資料調査報告

平成28年3月31日

編集 山口大学埋蔵文化財資料館

発行 山口大学

〒753-8511 山口市吉田1677-1

印刷 (有)三共印刷

〒759-0204 宇部市大字妻崎開作1953-8

